

群馬県無形文化財緊急調査報告書
群馬県教育委員会編

小正月のつくりもの
(四)

—— 中・東毛編 ——

序 文

元日を中心とした大正月に対して、正月十五日前後を小正月と呼び、古くから豊作祈願のための予祝行事が集中しております。

「小正月のつくりもの」はその典型的な事例で、ニワトコ・ミズブサ・ヌルデ等の木で作製したケズリバナ・粟穂穂穂・ハラミ著・カユカキ棒・農具等を供えまた、マユダマを作って座敷に飾ります。

しかし、このような「小正月のつくりもの」も近年の急速な生活様式の変化により次第に姿を消しており、この動きは都市化の進む平野部だけでなく、農山村部にも広がっております。そこで、この貴重な無形の民俗文化財を記録保存し、広く県民一般の方々に紹介して後世に継承したい、というのが本調査の目的です。

本書は昭和六〇年度からはじまった五年次計画の第四次として調査を行った中毛と、第五次として調査を行った東毛の調査報告書です。この地域は、県内でも都市化の進行が早く、とくに平野部については、元来この行事自体がそう盛んでなかったこともあり、他の地域に較べて調査事例が若干少なくなっています。

今日このような伝統的な製作技術を継承する後継者の減少は著しく、本書の刊行が、「つくりもの」をはじめとする無形文化財の保護と継承に少しでも役立つよう切望します。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり、調査員の各先生方はもとより、関係各市町村教育委員会をはじめとする数多くの方々にご協力をいただきました。

特に、ご多忙中にもかかわらず、快く調査にご協力いただきました調査対象者の皆様に対しまして、深甚なる謝意を表す次第であります。

平成二年三月

群馬県教育委員会教育長 千吉良 寛

目次

序文

無形文化財緊急調査実施要綱

(総論)

中東毛地方の「小正月のつくりもの」

| | |
|---------------|----|
| 一、はじめに | 5 |
| 二、中毛の特色 | 5 |
| 三、東毛の特色 | 7 |
| 四、調査をおえて | 8 |
| (各論) 一、中毛編 | |
| 角田林作家のつくりもの | |
| 一、はじめに | 9 |
| 二、山入り | 9 |
| 三、オカザリカエ | 9 |
| 四、供え方 | 10 |
| 五、小正月の行事との関わり | 10 |
| 六、おわりに | 12 |

林利盛家のつくりもの

| | |
|---------------|----|
| 一、はじめに | 13 |
| 二、山入り | 13 |
| 三、オカザリカエ | 13 |
| 四、供え方 | 15 |
| 五、小正月の行事との関わり | 15 |
| 六、おわりに | 16 |

永井一助家のつくりもの

| | |
|---------------|----|
| 一、概観 | 17 |
| 二、山始め(山入り) | 17 |
| 三、木の種類 | 17 |
| 四、つくる日、場所、道具 | 17 |
| 五、つくり方 | 18 |
| 六、飾りかえ、供え方 | 19 |
| 七、小正月の行事との関わり | 19 |
| 八、その他 | 20 |
| 柳井久雄家のつくりもの | |
| 一、概観 | 21 |
| 二、山始め(山入り) | 21 |
| 三、木の種類 | 21 |
| 四、造る日、場所、道具 | 21 |
| 五、つくり方 | 22 |
| 六、飾り方、供え方 | 22 |
| 七、小正月の行事との関わり | 23 |

鳥山長寿家のつくりもの

| | |
|---------------|----|
| 一、概観 | 24 |
| 二、山始め(山入り) | 24 |
| 三、木の種類 | 24 |
| 四、造る日、場所、道具 | 24 |
| 五、つくり方 | 25 |
| 六、飾りかえ、供え方 | 25 |
| 七、小正月行事とのかかわり | 26 |

青木博久家のつくりもの

| | |
|----------------|----|
| 一、あらし | 27 |
| 二、山入り | 27 |
| 三、モノツクリ | 27 |
| 四、カザリカエ | 28 |
| 五、道祖神とドンドヤキ | 29 |
| 六、十五日粥 | 29 |
| 七、かたづけ | 29 |
| 八、初午と小正月のツクリモノ | 30 |
| 九、その他 | 30 |
| 十、まとめ | 30 |

笹沢周作家のつくりもの

| | |
|-------------|----|
| 一、あらし | 31 |
| 二、山入り | 31 |
| 三、モノツクリ | 32 |
| 四、カザリカエ | 32 |
| 五、オシラマチ | 33 |
| 六、道祖神とドンドヤキ | 33 |
| 七、十五日粥 | 34 |
| 八、その他 | 34 |
| 九、まとめ | 35 |

新井 豊家のつくりもの

| | |
|-------------|----|
| 一、概観 | 36 |
| 二、山入り | 36 |
| 三、木の種類 | 36 |
| 四、造る日、場所、道具 | 37 |

五、作り方

| | |
|---------------|----|
| 六、飾りかえ、供え方 | 39 |
| 七、小正月の行事との関わり | 39 |
| 八、その他 | 40 |

藤生作十郎家のつくりもの

| | |
|-------------|----|
| 一、概観 | 41 |
| 二、山入り | 41 |
| 三、木の種類 | 41 |
| 四、造る日、場所、道具 | 42 |
| 五、作り方 | 42 |
| 六、飾りかえ、供え方 | 43 |
| 七、その他 | 43 |

石綿信雄家のつくりもの

| | |
|-------------|----|
| 一、あらし | 44 |
| 二、山始め | 44 |
| 三、モノツクリ | 44 |
| 四、オカザリカエ | 45 |
| 五、道祖神とドンドヤキ | 45 |
| 六、十五日粥 | 46 |
| 七、マユカキ | 46 |
| 八、その他 | 46 |
| 九、まとめ | 47 |

板野豊作家のつくりもの

| | |
|---------|----|
| 一、あらし | 48 |
| 二、山入り | 48 |
| 三、モノツクリ | 48 |

| | |
|-------------|----|
| 四、オカザリカエ | 49 |
| 五、道祖神とドンドヤキ | 49 |
| 六、小豆粥 | 50 |
| 七、その他 | 50 |
| 八、まとめ | 50 |
| 永田隆一家のつくりもの | |
| 一、あらし | 51 |
| 二、山始め | 51 |
| 三、モノツクリ | 51 |
| 四、カザリカエ | 52 |
| 五、オミタマサマ | 53 |
| 六、道祖神とドンド焼き | 53 |
| 七、十五日粥 | 53 |
| 八、その他 | 53 |
| 九、まとめ | 54 |

須水利隆家のつくりもの

| | |
|---------------|----|
| 一、概観 | 55 |
| 二、山入り | 55 |
| 三、木の種類 | 56 |
| 四、造る日・場所・道具 | 56 |
| 五、作り方 | 56 |
| 六、飾りかえ・供え方 | 57 |
| 七、小正月の行事との関わり | 58 |
| 石橋藤三郎家のつくりもの | |
| 一、概観 | 60 |
| 二、山入り | 60 |

| | |
|---------------|----|
| 三、木の種類 | 61 |
| 四、造る日・場所・道具 | 61 |
| 五、作り方 | 61 |
| 六、飾りかえ・供え方 | 62 |
| 七、小正月の行事との関わり | 63 |
| 《文庫2 東毛編》 | |
| 織村政一家のつくりもの | |
| 一、はじめに | 65 |
| 二、正月の準備 | 65 |
| 三、正月 | 66 |
| 四、モノツクリ | 67 |
| 五、小正月 | 68 |
| 六、おわりに | 69 |

佐藤敏夫家のつくりもの

| | |
|-------------|----|
| 一、はじめに | 70 |
| 二、正月 | 70 |
| 三、小正月 | 70 |
| 四、おわりに | 71 |
| 吉田敏蔵家のつくりもの | |
| 一、はじめに | 72 |
| 二、正月の用意 | 72 |
| 三、正月 | 72 |
| 四、モノツクリ | 74 |
| 五、小正月 | 75 |
| 六、つくりもの処分 | 76 |
| 七、おわりに | 77 |

重田昌盛家のつくりもの

| | |
|----------------|----|
| 一、概観 | 78 |
| 二、山はじめ | 78 |
| 三、木の種類 | 78 |
| 四、つくりもの、かざりかえ | 79 |
| 五、オシラマチ | 80 |
| 六、十五日がゆ | 80 |
| 七、十八日がゆ | 80 |
| 八、まゆかき | 80 |
| 九、さくはじめ | 81 |
| 十、まるび | 81 |
| 十一、むすび | 81 |
| 岡村武夫家のつくりもの | |
| 一、山始め | 82 |
| 二、木の種類 | 82 |
| 三、つくりもの | 83 |
| 四、かざりかえ | 83 |
| 五、道祖神まつり | 84 |
| 六、小正月の行事とのかかわり | 84 |
| 七、おわりに | 85 |
| 近野藤太郎家のつくりもの | |
| 一、山入り | 86 |
| 二、木の種類 | 86 |
| 三、作る日、場所、道具 | 86 |
| 四、作り方 | 86 |
| 五、飾りかえ、供え方 | 87 |

大塚耕作家のつくりもの

| | |
|---------------|-----|
| 一、山入り | 88 |
| 二、木の種類 | 88 |
| 三、作る日、場所、道具 | 88 |
| 四、作り方 | 88 |
| 五、飾りかえ、供え方 | 90 |
| 六、小正月行事との関わり | 91 |
| 七、その他 | 92 |
| 尾池住夫家のつくりもの | |
| 一、山入り | 93 |
| 二、木の種類 | 93 |
| 三、作る日、場所、道具 | 93 |
| 四、作り方 | 94 |
| 五、飾りかえ、供え方 | 94 |
| 六、小正月の行事との関わり | 96 |
| 七、その他 | 96 |
| 小池幸市家のつくりもの | |
| 一、概観 | 97 |
| 二、山入り | 97 |
| 三、木の種類 | 98 |
| 四、作る日、場所、道具 | 98 |
| 五、作り方 | 98 |
| 六、飾りかえ、供え方 | 99 |
| 七、小正月の行事との関わり | 100 |
| 八、その他 | 100 |

星野照次家のつくりもの

- 一、概観……………101
- 二、山入り……………101
- 三、ものづくり……………101
- 四、お飾りかえ……………102
- 五、まゆかき……………102
- 六、その他……………103

赤石恒男家のつくりもの

- 一、概観……………104
- 二、山入り……………104
- 三、ものづくり……………105
- 四、飾りかえ……………105
- 五、十五日粥……………106
- 六、その他……………106

猪野松次郎家のつくりもの

- 一、概観……………108
- 二、山入り……………108
- 三、木の種類……………108
- 四、作る日・場所・道具……………109
- 五、作り方……………109
- 六、飾りかえ・供え方……………110
- 七、小正月の行事との関わり……………111

(参考文献) 補充調査編

関沼豊太郎家のつくりもの

- 一、はじめに……………113
- 二、山入り……………113

飯塚貞文家のつくりもの

- 三、ものづくり……………113
- 四、飾りかえ……………115
- 五、小正月行事との関わり……………116
- 六、おわりに……………117

清水儀平家のつくりもの

- 一、概観……………122
- 二、山入り……………122
- 三、木の種類……………123
- 四、作る日・場所・道具……………123
- 五、作り方……………123
- 六、飾りかえ・供え方……………124
- 七、小正月の行事との関わり……………126

- 一、概観……………118
- 二、仕事始め……………118
- 三、木の種類……………118
- 四、作る日……………119
- 五、作り方……………119
- 六、飾りかえ……………120
- 七、小正月との関わり……………120
- 八、おわりに……………121

無形文化財緊急調査実施要綱

1. 趣 旨

本県には多種多様の無形文化財が存在しているが、社会生活の変化により急速に消滅しようとしている。

そこで、特に重要なもので、緊急に保存対策を講じなければならない無形の文化財について、調査のうえ記録を作成し、保存対策の基礎資料を得る。

2. 調査対象

「小正月のつくりもの」

元旦を中心とした大正月に対して、正月十五日前後の小正月には古くから豊作祈願の一方法としての豊作予祝行事が集中している。その一つとして小正月のモノツクリの行事がある。小正月を迎えるにあたってものつくりをして飾りかえを行うこの行事は、地域によって「ものつくり」、「かざりかえ」など様々な名称で呼ばれ、実際につくられるものの種類も豊富である。

マユダマ（メダマ）・ケズリバナは「つくりもの」の代表的事例であるが、この他にも粟穂穂（アホヒイボ）、俵・農道具一式・木刀類、ドウロクジン（道陸神）をはじめとする各種木像類、カユカキ棒、ハラミバシなどの製作が知られ、それらの地域的特色も著しい。

これらの製品は庶民の生活と密接なかかわりをもちながら今日まで人々に親しまれてきた。しかし近年ではこれらを製作する人々は減少し、作品の量も種類も少なくなっている。

そこで、現在残っている製作技術を中心に、事例（特定の個人の家）ごとに、「小正月のつくりもの」全般にわたって調査する。

3. 調査主体者 群馬県教育委員会

4. 調査計画

(1) 調査期間

昭和六十年より平成元年度までの五年計画（従来の四年計画を一年延長）

(2) 調査地域

県下全域を次の五地域に分割して各年次ごとに行う。

○昭和六十年（第一年次）吾妻地方

○昭和六十一年（第二年次）西毛地方

○昭和六十二年（第三年次）利根地方

○昭和六十三年（第四年次）中東毛地方Ⅰ

○平成元年度（第五年次）中東毛地方Ⅱ、補充調査

※ 詳細は別掲地図を参照

(3) 調査員（昭和六十三年・平成元年度）

阪本英一 県立図書館主任専門員

奈良秀重 中之条町文化財調査専門委員

神宮善彦 県立歴史博物館主任

井野誠一 前橋市教育委員会文化財保護課主任

井野修二 前橋市教育委員会文化財保護課主任

(4) 調査対象者

1. 昭和六十三年度（中毛地区）

○宮城村

角田林作（宮城村市之関五〇四）

○大胡町

林利蔵（大胡町茂木七三三）

○赤城村

鳥山長寿（赤城村見立三九）

○北橋村

永井一助（北橋村小室一三七）

○富士見村

柳井久雄（富士見村米野一四三）

○前橋市

青木博久

笹沢周作

石綿信雄

（前橋市荻窪町九六七）

（前橋市青梨子町一三七）

（前橋市飯土井町二二九）

○東村（勢）

新井豊（東村大字小夜戸一四八六）

○笠懸村

藤生作十郎（笠懸村阿左美三九五）

○赤堀町

板野豊作（赤堀町今井一三九八）

○敷塚本町

永田隆一（敷塚本町大久保五〇）

○新里村

須水利隆（新里村山上三〇五）

○柏川村

石橋藤三郎（柏川村月田二三三）

2. 平成元年度（東毛地区・補充調査）

(1) 東毛地区

○明和村

磯村政一（明和村斗合田二四一）

佐藤敏夫（明和村下江黒一三三）

○館林市

吉田敏蔵（館林市日向町七七〇）

○伊勢崎市

重田昌蔵（伊勢崎市稲荷五五二）

岡本武夫（伊勢崎市上之宮一四二〇）

○新田町

浜野藤太郎 (新田町村田一七四)

○黒保根村

大塚耕作 (黒保根村下田沢一三一八)

尾池住夫 (黒保根村下田沢八三四)

小池幸一 (黒保根村下田沢三三六)

○桐生市

星野照次 (桐生市河内町三の七三三)

○大間々町

赤石恒男 (大間々町小平二二八九)

○玉村町

猪野松次郎 (佐波郡玉村町稻石四八)

(2) 補充調査

○藤岡市

関沼豊太郎 (藤岡市金井三七九)

○中之条町

飯塚貞文 (中之条町大塚二五二)

○高崎市

清水儀平 (高崎市上小場町二二三六)

5. 調査内容

(1) 特定個人の家ごとに「小正月のつくりもの」すべてにわたって、その種類・技術・特色などについて調査する。

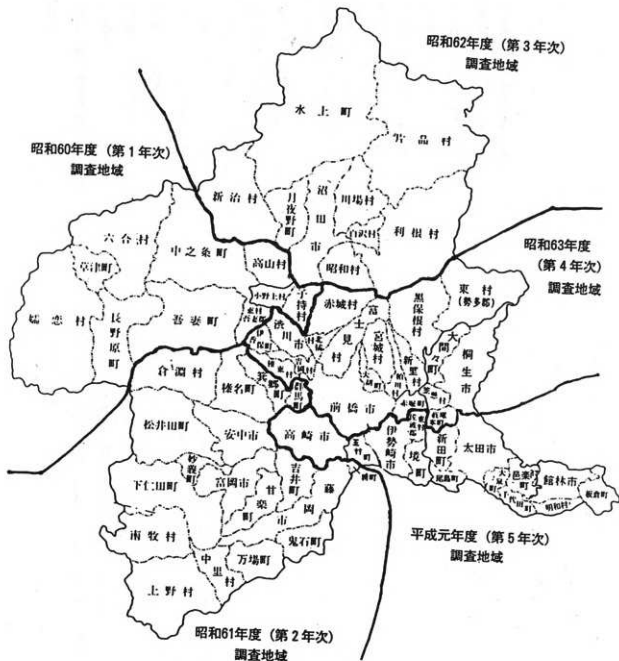
(2) 伝統と製作技術の継承

6. まとめ

(1) 調査資料・図面・写真などの作成・保存

(2) 各年次ごとに調査報告書「小正月のつくりもの」を発行する。

無形文化財緊急調査（小正月のつくりもの）年度別調査地域図



中毛・東毛の小正月づくりもの

一、はじめに

昭和六十年年度以来、県下を五地域（中毛・西毛・吾妻・利根・東毛）に分け進めてきた本調査は吾妻、西毛、利根の順で調査が終了し、順次報告書を刊行してきた。昭和六十二年年度現在、残すところは中・東毛であった。この両地域はその区切りがはっきりせず、特に桐生市、新田郡、山田郡は従来その時々都台でどちらにでも区分されてきた。そこで、これまで調査してきた「つくりもの」の分布の系統をもとにして、赤城山東南麓一体を「中毛」とし、山麓の前橋市・勢多郡・山田郡・桐生市等の周辺を昭和六十三年年度調査の対象とした。また、この地域より東の平野部を「東毛」に区分し、伊勢崎市・太田市・館林市・邑楽郡・新田郡等の周辺を平成元年度の調査区域とした。さらに元年度については、これまでの調査の中で漏れていたたり、調査後あらたにみつけたたりした事例についての補充調査も同時に行った。

この両地域はこれ以前の調査した地域に較べると、小正月の行事自体がそう盛んでなく、「つくりもの」も簡略なものが多かった。さらにこの地域は平野部ということもあってか、都市化の進展が著しく、年中行事自体の消滅が進み、十分な調査数が得られなかった。このため従来、地域毎に報告書を刊行してきたが今回は中毛・東毛をまとめて、これまでの調査地域の補充調査とあわせて報告する。

二、中毛の特色

一、ニワトコを中心にしたハナ

赤城南麓を中心としたこの地域は、ハナの材料としてはニワトコ以外にみられず、赤城村でクルマバナの一種がみられるが、他には一段バナ・二段バナ・十六バナが作られて供えられる。ハナギとして屋敷の一部に数本植えておくことも多く、その場合は山から伐って来ない。ハナばかりでなく、アワボ・ヒエボにも使われることが多く、吾妻、利根や、西毛一帯とも際立って違いをみせている。しかし、ハナの削り方はハナカキナタを使うもので、長いニワトコの皮をむいてから削り、二段というように切って作ることは共通である。

二、農道具

赤城南麓では、利根郡や東毛とも同じように、農道具は作らないことが一般的である。しかしそうした中で、黒保根村では、臼と杵をつくる例がある。臼はマユダマと同じ米の粉で作り、杵はヌルデの木で一本または二本作る。しかもタテギネ（立杵）であることが特色である。この地域ばかりか、調整用具として利用している事例は見当たらず（資料として水上町藤原の集百館に展示されているが、伝承として不確定で、ヨコギネ（横杵）が主役の中で、つくりものとして立杵が作られ、供えられていることは今後検討される問題とみられる。

三、アワボ・ヒエボ

赤城南麓のアワボ・ヒエボは、笹竹に穂をさすもので、穂もニワトコを使うものが多くみられ、七夕かざりのような形で堆肥場に立てられる。黒保根村下田沢にみられたように穂だけではなく、ハナも一緒にさして、ハナも実もつけて仕上げることもある。竹を割って曲げたものへ、ヌルデの穂をつける吾妻郡や西上州(西毛)とはちがっており、東毛の伝承につながるものである。赤城山をよんで北隣の利根郡東部にみられるものは、三階の枝をもつミズブサ(ミズキ)に丸いマユダマとハナを飾って立てるもの(片品村や利根村など)ともちがっている。

アワボ・ヒエボに関連してアワ俵・ヒエ俵(福俵)が考えられるが、中毛では見られないことは、農道具のないことも関連してあらためて検討されるべき問題かも知れない。

四、ハラミ箸は、十五日粥を食べる時の箸として共通して県内で作られ、使われているが、この地域では、十四日夜の「オミタマ様」に供える飯の上に立てられることが多い。オミタマ様の行事は、中毛・東毛を中心にした一帯でみられる行事で、富士見村の事例のように、神棚の一方にオミタマ様の座を設けて祀られることもあり、十四日夜、一合とか四合とかの米を炊いて、十六個のおにぎりにして(そのままだ盛りつける例もある)重箱に入れて、オミタマ様に供えるもので、年男がやることになっている家もある。仏壇に上げる例も多く見られ、オミタマ様は祖霊と考えられている。東毛ではハラミ箸を作ることが一般的でないこともあって、ウツギの枝をさすが、箸を立てるといいう形式は共通している。

五、カタナ(木刀)

黒保根村では、ヌルデの木でカタナ(木刀)を作っている。刀身の部分は皮をむいて作られるが、これはマユダマを飾る大きなボク(ヤマクワの株)の根元に、カユカキ棒や立杵と一緒に飾られる。現在の伝承では、ドンドンヤキで焼かれることもなく、道祖神信仰とのつながりもみられない。

六、マユダマ

マイダマ(マユダマ)は、一般には丸くて小さいのはヤマクワやミズブサ(ミズキ)の枝にさすが、「十一・十二」は大きなマユ形のものを作って桑の株の枝にさして上げる。この木を「カゴ木」とよぶことも多く、家によっては「若餅」と呼ばれる餅(十四日ついた餅は、新年になって初の餅つきになる)を四角に切ってさすことも、この地域の特色である。宮城村では、丸いマユダマの他に、サトイモの形、ツバキの花などを作ってさしたものをオカマ様(釜神)に供えた。豊作年鳥といって鳩の形をしたものを一個作ってさす家もあり、これは火事をさけるといわれた。

オカマ様のマユダマで注目されるのは黒保根村などの事例で、モノツクリで出た削りくずや木くずを、余ったヌルデやニワトコの木で包みこむようにして「俵づくり」にして作ったオカマ俵を、土間の隅の柱(カマ柱にあたる)の下に立て、これに三段のミズキの枝を立

て、マユダマを三十二個(三十四個という家もある)をさす。それにオカマ様夫婦の分というので二個加えて三十四個以上(三十六個以上ともいう)にしてオカマ様に供える。オカマ様(益神様)は三十二人の子ども(三十四人という話もある)がいるのでこれだけの数のマユダマを上げるのだという。

七、田の神様

赤城南麓一帯は、前橋市も含めて田の神様信仰がはつきりしており、田植えについては「田植えうた」が歌われ(朝の歌、昼の歌、夕の歌)があり、夜の田植えの祝いにはオサナブリの歌もある、富士真村や宮城村では、田の畦に「田の神様のお飯屋」を作って祀っている。直接のお祭りは、田植えが終わった時、お飯屋を新しく作りかえて、赤飯とおカシラツキを供えてやるが、正月には、暮にお飯屋へお松とお供え餅を供え、小正月には、ハナとマユダマを供えて拜む。田植えを初める日には、酒を供えて一同で飲んでから田に入っている。このように田の神信仰が現在でも生きているのがこの地区の特色である。

三、東毛の特色

一、つくりものが少い

東毛は、概して平地で、大きな山がないかわりに大きな河川である利根川が流れている。この地域は、近年急速に工業化、都市化が進み、農業も施設園芸化するなど変化が激しい地域である。

小正月のつくりものは一部の事例を除いて種類も、作る数も、県内の他地区に比してきわめて少いことが特色といえる。

ハナは、屋敷や畑の隅に植えられたニワトコで作られ、削りかたも、長くふわふわとしたチヂレを作るものでなく、削りを入れた程度であり、十ハバナについても明和村でみられるように、皮のついたまま削りを入れるとか、境町などでかつて見られたようにニワトコの枝そのものを削りにつけないまま水引きでしばって神棚にあげることもみられる。小さいものでは、竹を割って、その先を二つに割ったものへ、ニワトコの芽のついた棒とつかない棒とをさしこんだものを作って、年神や他の神、仏に上げるのも、ハナの変化した一種ともみられる。しかし、これは多野郡や甘楽郡の一部でみられるコンコチ、またはオカラコに共通する姿をもっていることも事実で、そのつながりは不明である。

二、ハラミ箸

かつては作られていたことも考えられるが、現在ではみられない。十五日粥でも使われないし、十四日のオニダマ様(中毛でのオミタマ様と同じとみられる)のおにぎりにもハラミ箸は使われることなく、ウツギの細い枝を切って、先をとがせた揚子のようなものをさして供えることが一般的である。

オニダマ様が行われているのとは反対に、十四日夜のオシラマチはなく、ことばも知らないほどである。(もちろんで二月初午の前にオシラ

マチをやることもない)

三、ワタノハナ

マユダマは丸いものが主で、十六マイダマも作られているが、ワタノハナとよぶものが作られるのがこの地区の特色である。丸くしたマユダマを上から押して上が開くようにして、そのまん中を指で押して棉の花が開いた形としたというもので、マユダマと一緒に柳の枝やケヤキの枝にさして飾った。かつてこの地域は木綿の産地であったから、綿花の収穫を折って作られたのがワタノハナといい、十五日の小豆粥を吹いて食うと「ワタノハナが落ちる」といわれたというのは、他の地域で「田植えに風が吹く」といわれるものとは違っている。邑楽町中野や館林でさかんに織られた中野緋も、こうした行事にまで支えられた棉栽培の上に発展していたものだったともいえるようである。

四、調査をおえて

五年間わたる「小正月づくりものの調査」の中で、吾妻郡、西毛、利根郡と回を重ね、第四年度の赤城南麓を中心とした中毛、第五年度の東毛は、調査家庭を探すのにも苦しむようになった。特に東毛については、当初より事例を調査するよりも、かつてやっていた姿の聞きとりだけでもやれたらという見通しで実施したが、予想以上に消滅していることを確認する結果になったと思われる。伝統的な正月行事、小正月行事と、小正月作りものを確認できたことは特筆できるであろう。

(阪本英一)

角田林作家のつくりもの

一、はじめに

角田家は、専業農家として、かつては米と養蚕を中心に経営していたが、現在は養豚業に力を入れている。家を出たすぐ東に水田があり、その一番上の田の畦に「田の神」のお飯屋が作られており、田植えの終る時に主人がお飯屋を新しく作り、お祭りをして来た家で、正月には松かさりとお供え餅を上げ、小正月にはハナとマユダマを上げていることに示されるように、古くからの農耕儀礼をいねいに伝えて来た家である。しかし近年の変化の波の中で近隣の農家では諸行事が簡略化されて小正月のつくりものもほとんど姿を消している。

二、山入り

六日が山始めの日（農始めは五日）で、裏山にお十二様（山神）のお飯屋があり、餅を供え、半紙を切ったものを上げてから山へ入り山仕事をしてくる。



写真1 モノヅクリ

ハナギは、ニワトコで、十一日に切ってくるが、カゴ木切りともいう。カゴ木とはマユダマをさす木のことで、もとはヤマクワの台下げをして仕立てておいたのを切ってきたが、これはザシキに飾る木で本数も少ないので次第にミズクサ（ミズモ）の木に代っている。家族がまたがないようなところに立てておき、オカザリカエまでとっておいた。

三、オカザリカエ

つくりものを作ったり、飾りかえをするのは十四日、天気にもよるが玄関先の陽だまりの所にむしろを敷いてつくりものをする。（写真1）道具はハナカキナタ、センチイバサミ、ノコギリ程度で、台は特に用意しない。作ったものもむしろの上に並べておいて、仕上がるとすぐに上げてしまう。

作るものは、ハナ、十二段のハナ、十六バネ、ケエカキ棒（かゆかき棒）、



写真2 角田家のハナ



写真3 マユダマ飾り

昔はアワボ・ヒエボも作ったが近年は作らない。
餅をさすこともない。
(写真2)

四、供え方

ハナは二段のものを神棚(年神様)に上げ(写真3)、十二、十六バナも上げる。仏壇(写真4)、台所、便所(写真5)、天神さん、十二様、稲荷、井戸などにもハナを上げ、それぞれマユダマを一緒に上げる。墓地や石仏などにも小さいハナを上げ、田の神さまのお飯屋にもハナとマユダマを上げる。昔はオシラ様には上げていたが、近年は養蚕をやめたこともあって上げない。

マユダマの十二、十六は、昔はミカンほどもある大きいのを作ったので、落ち易く、飾るのにしぼりつけることが大変だった。

五、小正月の行事との関わり

オシラマチ

角田家では、十四日に餅がつかない家例なので、こはんで年とりをして、特別な供えものもしていない。

オミタマサマ

やらない。

ハナの作り方は、ニワトコの枝の皮を全部むいて、ハナカキナクで削って(特に段をつけるというのではなく、まわりを一杯に削って全体がふっくらとなるように仕上げる)、一段で切って作る。十二バナは二段、十六バナは十六段になるように短かめの削をつけてゆく。

カユカキ樺は、ニワトコの枝の太いものを田の数だけ用意し(五、六本)、下を尖らせ、上の方は四つ割りにする。

ハラミバシは現在作らない。



写真5 便所に上げられたハナとマユダマ



写真4 仏壇に上げられたハナとマユダマ

アワボ・ヒエボは、笹竹の笹をはさみではぎり、枝を短かめに作ったハナを十数本さして作ったが、近年はやっていない。

マユダマは丸く作り、少し大きい十二、十六のマユダマも作る。近年はミズクサの枝にさして神棚の前にぎやかに飾り、小さい枝に三朝ぐらいたまものを屋敷神や便所など内外の神さまに上げる。

福俵や農道具、木刀などは作らない。

十五日粥

十五日朝、小豆粥を炊いて、カユカキ棒の割れめにマユダマをさして（供えてあるマユダマを一つとって、ホウチョウで四つに切って、それをさして）粥をかきまわして食べた。粥が熱くとも吹いて食べてはいけないといわれた。カユカキ棒は全部使い、半紙で包み、麻で結んで神棚に上げておいて、苗代づくりの時に水口に立てた。小豆粥は残しておいて田植えの日に食べると豊作になるともいわれた。また、余りや、洗い水を家のまわりにきれめなしにまくと「火伏せ」になるといわれ、嫁の大切な仕事だった。ヤカンでやるもので主家のまわりにまいた。

墓参り

十六日に墓参りをすると同じといわれてやったが、今日ではやっていない。

肥出し

馬を飼っていた頃は、十六日に馬小屋の肥出しをする事になっていた。もし出せない時は、馬を引き出しておいて、ホークやカナクマデで少し突っついてすませた。この時は四隅をやったが、昔は、馬屋肥を出さなければ若衆を遊ばせなかった。

初観音

十八日が初観音で、馬を曳いて石山の観音さんにお参りに行ったり、宮城村の中の馬場の馬頭観音さんに行った。馬の安全を祈願したわけて、馬の訓練もかねていた。

十八日粥はしなかった。

まゆかき

マユダマをとるのをムユカキともいった。早くとるのがよいといわれ、「十八日の風に合わせるな」といって十七日に片づけた。たくさん作っていた頃、食料事情の悪かった時代には、よその人に分けたりして食べたものである。マユダマを片づけると「正月が終わった」といったものである。

ハナ

正月が終わると下げてとっておき、養蚕の時マブシの代用にすることもあるが、かなりよいマユがとれた。二十日正月に片づけて束ねてとっておいたものである。

六、おわりに

角田家の「田の神」

赤城南麓では、県内でも田の神信仰がはっきりしている地区で、「田植えうた」もさかんに歌われていたことで知られているが、角田家では、家の近くにまとまった水田があり、その一番上の田の畦に田の神のお飯屋を祀っている。(写真6) 田植えを始める時、お飯屋に酒を供え、田に入る者が盃に一杯ずつもらって飲んで田植えを始める。作業の安全を祈るわけである。田植えが終る時、最後の田の水口が植え終りになるので、一たん植えた苗を七株ぬきとっておいて別の苗を植えると、抜いてあった苗をきれいに洗って家に持ち帰り、箕の中へ七・五・三に並べて釜神様に供える。主人は水田がひと目で見たせる一番先の田の畦に竹とわらでお飯屋を作り、柱にシメをはり、御幣を立てて田の神を祀る。家から供えものを用意して来てお祭りをする。赤飯とオカシラツキを供えて拜むもので、この後釜神さまにも供えものをしてオサナブリ(マングアライともいう)をする。

暮の三十日には、松かさりとおそなえを上げる。小正月のオカザリカエには、ハナとマユダマを供えて拜む。

このように角田家では、田の神信仰がはっきりした形で続けられていて、特色ある事例として注目される。



写真6 田の神様に上げられたマユダマとハナ

(坂本英一)

林利蔵家のつくりもの

一、はじめに

林家は、専業農家で、現在はシイタケもやっており、林一族三戸でまごまごって居住している。林家では元旦はソバ家例で、しかも餅つきは元日の朝ということになっている。十二時（午前零時）をすぎればよいというので、除夜の鐘とともにもち米をいって用意することになっていたが、現在は前日に用意しておく。そんなこともあって、三が日は、ソバ、汁粉、雑煮ということになるという。（裏の家は赤飯の家例で、十三日まで餅がつけないので、林家からお配りしたという。）

二、山入り

六日が山始め、朝、雑煮を食べてから山入りのまねごとをした。昔は、山で餅をあぶって食べたが、これは子どもの頃のこと、やっと思い出す程度。その頃は、クズカキ（落ち葉集め）をしたり、下草刈りなどの山仕事をしたものである。

ハナギはにわたが中心で、他の木は使わない。しかも屋敷の隅に植えてあったから、好きな時に切るのも、どこの山とか、いつ切るなどとはきまっていない。そんなふうだから山の神への供えものもない。マイダマ木（マユダマをさす木）もきまっていないから、適当に切るが、現在はミズクサ（ミズキ）を使っている。

箸の木は柳の木を使う。

三、オカザリカエ

小正月のつくりものを作る日は十四日、まとめてオカザリカエという。朝、餅をつき、マユダマを作り、ハナをかいて、一緒に上げる。餅も、小正月にはビションマイ（汚れまゆ）になると困るから、アンピン（あんこを入れた丸め餅）は作らない。餅はのぼして板餅にし、その一部は四角に切って、マユダマと一緒にさす。

ハナをかくのは縁側で、日向ぼっこをしながらやる。道具は、昔はハナカキナクを使っていたが、なくなってしまうからハナクでまねごとをして来た。ノコギリも使った。台はなく、特別ないれものも用意しない。

（写真7）

ハナは、けずりは長いものでなく、チヂレをつけるというよりはケズリを入れるという程度で、木の大き



写真7 モノヅクリ



写真8 ハナとハナカキナタ

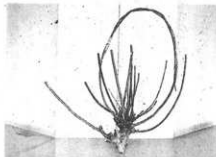


写真9 神棚に供えるカゴ木(柳の木)

さに応じて作る。(写真8)

十二バナ、十八バナは、皮をむいた後、下の方から十二段、十六段に削って、二本を一緒にして上げる。

カユカキ棒は下を削らず、上の方を四ツ割りにし、ここには餅をさす。ハナを一段つける。

ハラミバシは、ヤナギの枝の太いのを使って、まん中を太く、上下を細くする。現在は箸の長さを八寸にする。

福俵、農道具は作ったことはない。

アワボ・ヒエボというものかどうかはわからないが、子どもの頃、立てたのを見たことがある。笹竹に、ハナギ(ニワトコ)を削った(ハナをつけた)ものと、マユダマをさしたものだ。ヌルデは使わず、ヌルデということばも知らなかった。ショウマメとよぶもので、寺でゴマ木といっていた。

マユダマは丸くまるめる。十二というのは大きいのをマユ形に六個、餅を六枚、十六というのはマユ形八個、餅を八枚用意し、十二はヤナギの株をとって来て、上で枝を交叉するようにして吊るせるようにしてから(写真9)残りの枝に十二個さす。十六は桑の株をとって来て、十二のように吊るせるようにした後の枝にそれぞれさして作る。(写真10・11)

隣接の木瀬地区(前橋市)ではマユダマを作らず、餅を切つて柳にさすという。

(林利憲氏の奥さんの実家が木瀬地区)



写真10 マユダマさし



写真11 十六マユダマをさす

クナザラシとよんでいるが、これは名称はない)
ドンドンヤキ

現在はやっていない。昔、明治初年のことというが、ドンドンヤキの火で寺を焼いてしまったので、それ以後は一切やらなくなったということである。また、その火事で、芝居の衣装も焼いてしまったという。



写真13 ザシキとマユダマに供えられるマユダマ

マルヒ
十四日に、年男がやる行事で、米一合くらい、火を新しくして炊き上げ、丸小鉢に山盛りにし、これに十二本のハラミバシを立て、カユカキ棒も一緒に神棚へ供える。灯明も上げるが、これらはすべて年男がやる。これは十七日に下げてオジヤにして食べることになっている。(四日の場合は



写真12 正月棚に供えられた十六マイダマ(四角いものは餅)

四、供え方

ハナ

神棚(年神)には二本、他の仏壇、えびす大黒、釜神、井戸神などには一本ずつ。馬頭観音、庚申様などにも一本ずつ上げる。

アワボ・ヒエボらしいものは、暮に出した馬屋肥を積み上げておいたものの上に立てていた。豊作を祈願するものと聞いている。

マユダマ

神棚の前に、十二と十六を天井から吊り下げるようにして供える。(写真12・13) ザシキの隅のようになるが、これが年神様への供えものになる。

昔は、どの部屋にもマユダマを飾ったが、現在は、床の間、仏壇、オカマ様、玄関(写真14)、外便所、屋敷稲荷などで、数はきまっていないから、三個から五個くらいをミスクサの枝にさして上げる。

五、小正月の行事との関わり



写真14 玄関のハナとマユダマ

十五日粥

十五日朝、小豆粥を炊いて、カユカキ棒でかきまわして（餅をはさんで）食べる。この時吹いて食うなという。「田植えに風が吹く」といわれる。木瀬では「娘が十五日粥を吹いて食ったから、嫁入りに風が吹いた」といったことがある。

カユカキ棒は半紙で包んで大神宮さま（神棚）へ上げておいて、苗代の水口に立てた。小豆粥の残りや洗水は、まいたことはない。まゆかき

十七日朝、マユダマをとって片づける。これは保存しておいてホド焼きして食べた。油でいって食うところ（木瀬）もある。ハナも十七日に片づける。畑の隅などで燃すことにしている。

門松のほうは、二十日正月までは芯松をつけたままにしておいて二十日の朝片づける。

六、おわりに

大胡町茂木は、宮城村に隣りあっているわけであるが、林家では宮城村の角田家のような「田の神」信仰の行事はみられない。餅を切つてマユダマと一緒にさして飾ることは、赤城南麓で目立つことであるが、養蚕とのつながりの方が意味があるようである。農道具や木刀を作らず、ヌルデの木を知らなかったということも珍しい事例であった。

（版本英一）

永井一助家のつくりもの

一、概 観

主要地方道渋川大胡線北橋村役場下の交差点を北へ向い、東京電力佐久発電所調整池の北の道を小室敷石住居跡を目標に進んだ、三柱神社の北に位置する集落に在る。祖父が赤城村より移り住んだという農家であり、つくりものも純粹な北橋村流儀のものではない。

二、山始め（山入り）

一月六日、酒、オサゴ、頭つき（ニボシ）の供えものと半紙一枚を持って、東の方向の山へ行く。山で半紙を手で切り御幣をつくり木の枝に結びつけ、供えものを進めて山の安全を祈りおがむ。（写真15）

特別の習わし方法もなく、ミズクサ（ミズキ）、オワカド（ぬるで）コメゴメ、ニワトコの木を切り、軽トラック等の自動車（昔は背負ったり、肩にかついだりした）で運び「つばやま」と呼ぶ庭のかたすみに置き、供え物等はない。

三、木の種類

ハナに使う木は、ニワトコ、コメゴメ、つくりものにはオツカド、年神、仏壇、家の外に飾るまゆ玉の木は、ミズクサ、ざしきには、ミズクサ、ヤマクワ（やまぼうし）を、オシラ様のまゆだまの木は、ミズクサ、ヤマクワ、桑の木を使う、桑の木は昔は蚕のあたる家の桑原（桑園）のものをもらってきた例もあるが、大部分は自分の家の桑を切った。

アワボ、ヒイボには、オツカド、ニワトコを、はらみばしは、オツカドの木を使う。

四、つくる日、場所、道具

十三日朝から、のこぎり、なた、剪定ばさみ、ハナカキナタなどの諸道具と台に使う「まき」などを用意し、以前はざしきに敷物をしいてつくったが、しいたけ栽培をするようになってからは、しいたけの小屋にむしろなどを敷いてつくる。つくったものは「箕」に入れて、ざしきに置く。

ハナなどは十二日に渋川の市で売っている。



写真 15 山入り



写真16 ハナカキ

五、つくり方

(一) ハナの作り方

「ニワトコ」を四十五センチぐらいの長さに切り二段ハナを四本つくる。

(写真16)

「ニワトコ」を二十五センチぐらいの長さに切り一段ハナを十本ぐらいつくる(外かざり)

(二) カユカキ棒の作り方

オッカドを三センチぐらいの長さに二本切り、片方(木の元)を四ツ割りとし、一方(木の末)をとがらせる。

(三) ハラミバシの作り方

オッカドの木を二十五センチ(八寸)ぐらいに切って割り、中程を少しふくらませるように、なたなどで作る。

十二膳はオシラ様のオタキアゲの分とし、その外に家の人数分作る。(写真17)

(四) アワボ、ヒエボの作り方

「ニワトコ」「オッカド」の細めのものをそれぞれ十五センチ(五寸)ぐらいに切り、それぞれ、四本は皮をむき、他の四本は皮をむかずにおき、竹を十六に割り、適宜割った先にさす。

(五) まゆだまの作り方

秋の収穫の時に調製の際「米搗機」に出た実入りのよくない米を十一月末の水車当番の日に揚き(せちつきと云う)水で洗い乾燥したものを一月五日に粉にひき十三日につくる。

神棚、年神、仏だん、外かざりなどの丸い小さいものは適宜につくり、

十六まいだま(オシラサマ用)は一升の粉で、まゆだまの形をしたものと丸形のを十六個つくり、箕に入れておく。(写真18)

十六まいだまは桑の木に他のものは、ミスクサ、ヤマツクワの木にさす、またまゆだまのゆで汁は家畜に与える。



写真18 ツクリモノとマユダマ



写真17 ハラミバシ作り



写真20 アワボ・ヒエボ



写真19 年神

六、飾りかえ、供え方

飾りかえは十三日に行う「ハナ」は年神様の棚へコネゴメの二段バナを四本(写真19)、仏たん、えびす様、釜神様、井戸神、藁、オソウデン様、地神様には一段バナを一つ、オシラ様には一段バナを五本ぐらい供える。

アワボ、ヒエボは堆肥の上に立てる。何の神様だかわからないが供えている。(写真20)

まゆだまは年神様へヤマックワの木一本、ミズクサ二本にそれぞれ十個程度さして飾り、大正月の供え物の竹の上に供える。

オシラ様には十六まいだまと小さくまるいまいだまを、桑の木、ミズクサ、ヤマックワ(ボク)に適宜にぎやかになるようにさし、サカキの枝を添え、花菓子を枝にさげてさしきに飾る。(写真21・22)

七、小正月の行事とのかかわり

(一) オシラマチ

昔は米一升を炊いてそれを重箱に山盛りにし、その上に「ハラミバシ」十二膳を立ててさし神棚へ供えたが、現在は一升の生米を重箱に山盛りにし、ハラミバシ十二膳を立てて供えるように簡略化した。

(二) 十五日に小豆がゆを炊き、かゆの表面を「カユカキ棒」でかきまわし、炊きあげる。これを神棚に置いて、苗代の水口に立てる、初種を播くときに「カユカキ棒」の上に初を二、三粒置いてから播きはじめる。

小豆がゆは十五日の朝、家中で「ハラミバシ」を使って食べるが、このときかゆをさますために吹いてはいけない。このハラミバシは、とって置き、祝事(祝儀、家のたてまいなど)の時に「キンピラ」をつくるのに使う。



写真21 まゆかき



写真22 オシラ様飾り

(三) 十八日には十五日の小豆がゆをとっておき、あたためて神棚へ供えてから家の主人が食べる。
あたためた鍋または釜を洗った水は、家の入口の雨だれ落ちへまく。

(四) まゆかきは十八日に行い、まゆだま等は箕とザルに入れる。

八、その他

(一) 一月七日は、草刈り縄(馬をひいて草刈りに行く時刈った草を結えるもの)をなう(作る)日とされていた。長さ五尺五寸の縄十二本を一駄(いちだん)と言ひ一年中使う分として四〜五駄分をない、オソウデン様にしんせておいた。

(二) サクタテ

赤と黄の色紙を「カヤ」の軸の先にまきつけて、サクバナナ一对をつくり、畑に立てて置いた松かさりの所へ立てて(写真23)、手紙で「サク」をきり農作を折る。

昔は一人者の爺さんが絵ヒラといっしょに売りにきたので買ったものである。

(三) 花菓子

高崎市九蔵町町美瀧屋製菓の製造のもの
飾りまゆだまは前橋市千代田町、五光(問屋)扱ひ品

(奈良秀重)



写真23 サクタテ

柳井久雄家のつくりもの

一、概観

主要地方道渋川大胡線を渋川から大胡に向けて進むと米野の交差点に至る。この左右の街道が現在の北橋村、赤城村を経て沼田に通する沼田街道で、ここはその宿場として栄え、毎月八日には市が開かれるという。そのおもかげが残されている集落の中央に柳井家がある。

二、山始め（山入り）

一月六日に山へ行き餅とゴマメを山の神に供え山の安全を祈ったあと、ヤマクワ、ニワトコ、オッカドなどを切って迎える。農業構造改善事業で農地が整理される前はオッカドがたくさんあったが、現在はないので、ニワトコで代用する。

三、木の種類

ニワトコ、ヤマクワ、オッカド（ニワトコでまにあわせる）

ハナの木はニワトコ、ハラミバシはオッカド（ニワトコでまにあわせる）、まゆだまの木はヤマクワ（ヤマボウシ）を使う。

四、造る日、場所、道具

十三日、庭の日当りのよい所にむしろなどを敷き、まきなどを台にして、のこぎり、なた、ハナカキナタ等の道具でつくる。（写真24）



写真24 ハナカキ



写真26 ハラミバシとカユカキボウ

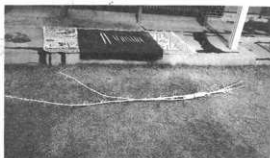


写真25 十二バナ・十六バナ



写真27 正月だな

五、つくり方

ハナはニワトコ一本を十二段に、他の一本は十六段にかき「みずひき」で結ぶ。(写真25)

ハラミバシは
オツカドの木を
細く割って中ほどを太く、両端を細くしたもの
を家族の数だけ
つくる。(写真

26)
カユカキボウ

はオツカドで二本つくり一方を十字に割る。
まゆだまは米の粉で作る。

六、飾り方、供え方

ハナ(十一、十二)は神だまへ供える。

ボク(ヤマクワ)にまゆだま十二個と、もち(おそなえ餅)を十六個さして正月だまへ供える。(写真27)

小さいボクに切りもち、まゆだまをさして仏だん、稲荷様(写真28)、歳の入口(写真29)、門などに飾る。年男が米三合三勺を炊き、神のハチに盛り家族数のハラミバシをさして正月様にそなえる。(写真30)



写真29 盒へ供え物



写真28 稲荷様かざり



写真30 オクキアゲ



写真31 サクタテ

七、小正月の行事とのかかわり

(一) 十五日には小豆がゆを炊き、かゆかき棒でかきまわし、神だなに
しんせておき、田植の時に水口へ立てる。

また、小豆がゆを吹いて食べると田植に風が吹くといっているので、早
く炊いてさましてたべた。

(二) 十七日には小正月のお飾りを下げる、ボクにさしたまゆだま、切
り餅をとる。

(三) 十八日には十五日の小豆がゆの鍋や釜を洗った水を家、蔵、物置
き小屋などのまわりにまく(モグラがもぐらないように)

(四) 十一日には倉開きといい、倉を開けて、お膳に正月様の餅とゴマ
メをのせて供える。

また、「サク立て」といい、畑へ行き、歳神様の方を向き、サクを
たてサクの中に「オサゴ」と「ゴマメ」それと松の枝を供える。

〈写真31〉

(奈良秀重)

鳥山長寿家のつくりもの

一、概観

県道渋川大間々線を渋川から進み、国指定重要文化財財三原田歌舞伎舞台をすぎてもまもなく北に入ったあたりが鳥山長寿家の在る見立集落である。鳥山家は現太田市の鳥山郷から出た新田氏一族の里見一族であり、屋敷に隣接した一族の墓地には薬師様を祭っている。お堂の裏には古い石造物が並びその中に五輪塔の一部と思われるものがあり、それに元久一年の文字が刻まれている。近くには赤城村歴史資料館があり、また西方近くには関越高速が走っている。

二、山始め（山入り）

一月四日に自分所有の山へ「のしもち」二まいを半紙に包んで持っていく、山へ着くと、包んでいった半紙を手でさいて御幣をつくり、近々の木などにしぼりつけて、もちを供えて拜む。（写真32）そのあとで木を切り、肩でかついて運び、庭の築山の猿田彦神の前たてかけておく。（写真33）



写真32 山入り



写真33 山入り

三、木の種類

ハナに使う木は「ニワトコ」、つくりものに使う木はヌルデ（オッカド、ヌリデ）である。

まゆだまの木は、ミズクサ（ミズキ）とヤマクワの二種類をこの神様にも使う。

ミズクサは火を防ぐ縁起の良い木と言われている。

アワボ、ヒエボとハラミバシの木はオッカドを使う。

四、造る日、場所、道具

十二日（都合で一〜二日早いこともある）に造るがこの日を特別な呼び方はしない。庭の日当りのよい所にむしろを敷き、まきなどを台とし、のこぎり、なた、ハナかきなどを使って造る。（写真34）造ったもの



写真36 神だな飾り



写真34 ハナカキ



写真35 アワボ・ヒエボ

は神だなにあげておく。
ハナ等は渋川の市(十二日)で売っている。

五、つくり方

十六バナは、ニワトコの長いものを二本用意し、それぞれ八節の皮をむき、ハナをかく。三段バナは、ニワトコの三十センチぐらいのもの、皮をむいてつくる。二段バナは二十センチぐらいに切りつくる。

カユカキ棒は太めのオウカドを一本三十センチ位に切って皮をむき、木の末の方をとがらせ、元の方を十文字に割って餅をはさむ。

ハラミバシはオウカドを細く割って中ほどを太く両はしを細く造る。オシラサマのハシは十二本に加えて、家の人数分だけ造る。

アワボ、ヒエボは太めの竹を割り、オウカドを十五センチぐらいに切り皮をむいたものを八本、竹の先につける。また、枝つきの竹にニワトコを小さく切りハナにしたものを枝の先に二十ぐらいつける。(写真35)昔は農具のエンガ、テンガなどを造ったが、今は造らない。

六、飾りかえ、供え方

飾りかえは十三日にする。ハナは神だたと年神様には十六バナ(写真36)、家の入口と薬師堂には三段バナ、仏だん、えびす様、釜神様、墓地にはそれぞれ二段バナを供える。(写真37)



写真37 ざしきかざり

七、小正月行事とのかかわり

(一) オシラマチとつくりもの

十四日の夕食後オタキアゲと呼び、飯を炊き大きい神の鉢(昔は「うつし鉢」という少し深い鉢)に盛り「ハラミバシ」を十二本立てて神だなへしんぜる。(写真38)

昔は桑の根っこをさしきのいろりで一晚中もしていぶしたものである。

(二) サクタテ

松かさりのとき、畑(田)に杭を立て三がい松を立てておく(しめ縄はつけない)十一日にサクバナ三本(かやのくきの先に赤と黄の色紙をまいて作る)を松の所に立てておがみ、織でサクを切る、供え物はしない(昔、サクバナは売りに来たものを買ったものである)。

(奈良秀重)

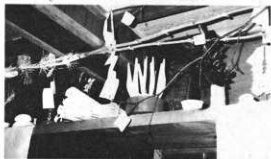


写真38 オタキアゲ

青木博久家のつくりもの

一、あらまし

萩窪町は前橋市の北西部、赤城山麓にあたり、市内でも古い民俗がのこされているところである。青木家では、ハナ、まゆだま、カユカキ棒などのほかに神棚に一年中上げておく木があり、これは西毛地域にみられる木刀と関連するものかもしれない。

二、山入り

正月四日に自分の家の山に行つて、式をする。決めた木のところに行き、下草を刈り払う。小魚と切りもちを半紙の上に置き、幣束を付

け、十二様に手を合わせて折る。この日、ツクリモノの木をノコギリで切ってくる。ニワトコ、ヤマクワ、萩の木を切るが、萩に似た木として、サルスベリやナラの木を切る。時には柿の木を使うこともある。

切った木は竈にいられてはこび、日陰においておく。

三、モノツクリ

正月十四日はオカザリカエといつて、小正月のお飾りを作る日だった。朝から餅をつき、その合間に作った。

日当たりのいい庭で、ハナカキ、剪定ばさみ、ナタ、ノコギリを使って作った。台は特になく、すぐに飾ったので、いれものもなかった。(写真39)

ハナは、三段のものと、十二段のものがあり、ニワトコの木の皮をむいて、根もとを手前にもってきて、手前にかいた。(写真40)

三段のうち、大きいものは家の外に飾り、小さいものは、家の中に飾った。十二段のものは、正月棚に横にしておいた。

カユカキ棒は一方を十文字に割り、餅をいれた。苗代の水口にたてた



写真39



写真40



写真44



写真41



写真45



写真42

正月十四日が飾りかえで、大正月の飾りをとって、小正月の飾りにした。三段ハナの小

四、カザリ カエ

には柿をつかい、繭玉の木には、山桑の木を使った。(写真44・45・46・47) 箸は、篠で作った。この箸は神棚に上げるためのもので、それ以外には使わない。
ハラミバシ、福儀、アワボ・ヒエボ、木刀、農道具は作らない。



写真43



写真46

ので、苗代の数だけ作った。ハナはかかない。(写真41・42・43)
神棚にあげる木は、ニワトコで、皮をむかず、また、ハナもかかない状態で、二本を水引きでしばっておく。一年中神棚にあげておき十四日のドンド焼きで燃やした。
まゆだまは、暮に用意した粉を十四日にこねてふかした。その日に木にさした。
神様によっての区別はないが、十二、十六は正月棚の両方の釘から下げた。この木は桑の木であるが、カゴ木

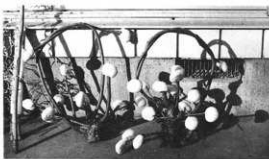


写真47

は神棚、仏壇、えびす様、釜神様に飾った。大きいハナは井戸神、便所、馬小屋、間口、納展、倉に飾った。墓地には入口に大きいもの一つ。馬頭観世音に屋敷稲荷、オシラ様に飾った。墓地の入口には大きい三段ハナを一つ飾った。

また、オシラ様のハナは、神棚に三本で一つの幣束をおき、三段の小さいものを飾った。

ここには、門松のしんを一段残しておき、もちをさした。外のもは二十八日まで、中のもは十八日まで飾った。

まゆだまは、米の粉を使った。暮の内に二晩くらいかけてひいておき十四日にこねてふかした。すべておなじ大きさで、ますに入れて、桑ややまくわの木につけた。数は全部で五十くらい作った。ハナと同じくらいである。木には飾り菓子を下げた。また、まぶしの意味で、萩の木を皮つきのままハナカキで削って、一つの木に三つつけた。飾った木を八個作って、歳神様や神棚、各部屋や玄関に飾った。正月様の棚には十二と十六のまゆだまを付けたものを下げた。これは桑の木だった。また他に飾った木をかこ木といった。

五、道祖神とドンドヤキ

昭和三十年頃までやっていた。子どもが大正月のお飾りをあつめた。もちとお金をもらった。あつめたお飾りをもやし、もちを焼いて食べるとかせをひかないといわれた。

六、十五日粥

正月十五日には、小豆粥を作った。吹いて食べるを田植えに風が吹くといわれた。カユカキ棒で粥をかきまわし、上からついた。カユカキ棒はそのまま半紙につつんで、水引でしばり、神棚にあげておいた。これは苗代の水口に立てた。苗代の数だけ必要だった。この粥の洗い汁をまくと、もぐら除けになった。もぐらがもぐらないようにといっていた。

七、かたづけ

正月十八日は、おたなさがしといって、まゆだまをとったり、小正月のお飾りを片づけた。まゆだまは適当なれものに入れておき、干して油で揚げて、砂糖を付けて食べた。ハナなどは燃やした。

この日、十八日粥をつくった。十五日の粥をとっておいて、足して作った。

八、初午と小正月のツクリモノ

初午には大きいまゆだまをつくり、ますにいれて、オシラ様にあげた。ますの四隅にワラを立てた。

九、その他

蚤が上手な家の木を盗んでくると、蚤ができるようになる。盗まれた家でも、台下げになり、若い枝が下からでてくるので、逆によかった。

また、大根を盗んでくると蚤があたることもいった。

正月十四日の晩、おたきあげをした。夕食後おはちに御飯を山盛りにしてあげた。男がやるもので、盛る分を炊いてあげた。この日一回あげた。

成り木責めは、秋の収穫の後、花芽のつくころやった。

十、まとめ

青木家の小正月のツクリモノは、前橋市内としては、古い形を残している方である。各家でやっているもので、どんと焼きなどと違い、伝承が各家の努力による点が、継承を難しくしているように思われる。

(井野修二)

笹沢周作家のつくりもの



写真48

一、あらまし
前橋市内でも、利根川西岸は榛名山麓地帯であり、群馬郡としての民俗圏に入る。笹沢家の民俗もその範疇にはいる。笹沢氏は民俗に特に関心があり、上青梨子町が含まれる前橋市清里地区の民俗に関する著作もある。自分の家に伝わる行事を忠実に実行している。

二、山入り

正月六日に年男がカゴギとニワトコをとってくる。十二様を拝むのは自分の家の山で、切るのは木が足りなければどこの山でも良かった。

山の主木に縄を一巻しておしめを下げ、おさき、お頭付きか鱈節をまずに入れて供えた。おしめは半紙を二つ折りにしたもので、四垂れ幣を作った。(写真48・49)

鋸と鉋、桑きり鎌で切る。みずき、ニワトコ、えこのき、こめこめ(紫式部)を切って縄でしばって担いできた。



写真49



写真50

庭の坪山神様に預け、樹木に立てかけておいた。二三日前に外皮をむいて、影干ししておいた。特にそなえるものはない。(写真50)



写真52



写真51

三、モノツクリ

正月十三日が飾り替えといつて、大正月のお飾りをして、小正月のお飾りをした。作るのは、十二日、午前中餅つきをし、午後ツクリモノを作った。

したこしらえとハナカキは家の軒場で、お飾りは床の間でやった。

道具は木はさみ、鋸、鉋、ハナカキナタ、桑きり鎌を使った。台はチャブ台で昔は桑きり板を使った。

作ったものはゴザあるいは箕にいれておいて、床の間においた。

ハナはニワトコの木で作った。十六段のものと二段のものがある。十六段は皮をむいたものとむかないものがある。(写真51)

カユカキ棒はニワトコの木をけずった。片方をとがらせ、もう一方は四つにわり、まゆだまをはさむ。二本一組。笹沢家では、このカユカキ棒をハラミ棒といっている。

箸は柳の木を使う。暮にとってきた。ゆでて皮をむいて作る。元日から使いはじめる。

ハラミバシ、福俵、アワボ・ヒエボ、木刀、農道具は作らない。

四、オカザリカエ

正月十三日が飾り替えの日である。

ハナを飾った。十六段の皮をむかないものを堆肥場に、むいたものを室内と坪山神様にあげた。部屋の鴨

居にあげておく室内用は特に吟味したという大きいものである。二段のものは、大正月のコジツコメをあげたところにあげた。神棚には四隅に薬で結んだ。仏壇やおしらは花瓶にさした。

稲荷様、えびす様、石造物、神社やお堂などは、前に立てた。釜神様はお勝手の棚に二本飾った。

井戸神様は井戸小屋の二本の柱に縄で結んで立てた。墓地には松幹に縄で結んで立てた。山の

神は坪山神様と兼ねて立てた。これ以上には、便



写真53



写真54



写真55

た。(写真54・55)

まゆだまをさす木は、桑、みずき、かりん、えこ、こめこめである。大正月の松幹に縄でむすびつける。お宮には、脇に二本たてかける。(写真56)

五、オシラマチ

正月十四日の夜はおしらまちで下げたまゆだまを煮てあんころがしを供えたり、食べたりした。

六、道祖神とドンドヤキ

道祖神講は六日から準備に入る。数え十五歳を小屋頭、十四歳を脇とつりよう、十三歳を人足まわしといった。頭が材料あつめや、人別買いをし、お菓子やお酒の用意もする。

十三日の午後、小屋作りの触れにまわる。太鼓をたたきながら、「小屋作りにてきてください」といいながら回る。一軒から一人が縄と鉈を持って、小屋作りに来た。親竹を十六本使って作る。中に閉如婁を作る。小屋祝いのお酒を配るが、水で半分ずつめてある。その晩は、頭の家で、五目飯をこちそうになる。

所、おそうぜんさま、臼、倉、納屋がある。(写真52・53)

まゆだま飾りは、正月十三日の朝食後早めに作った。粉は、残米、屑米を煮にひいておいた。粟や稗の粉も昔は使った。黍の粉は黄色くするのに使った。黄色はコウケンを表した。コウケンは糸が丈夫だが染色しにくかった。木には普通のまゆだまのほか、餅の十六という、倍くらい大ききがあるものもつけた。

米の粉で、ノデンボウという綿の花を作り、大黒柱に檜の木の枝をしばって、枝にさした。

大きさは後で下げにいけない所は小さいもの、他は大きさは同じだった。

まゆだまは、しょうぎやお鉢にいでた。まゆだま以外には、まぶしの意味で、ハナヤ、飾り餅、そばをつけ、飾り菓子下げた。また、てまり、折り鶴を下げた。干支の動物をだんこで作って、根もとにおい

十四日の午前四時ころ燃やす。三時半ころから、太鼓をたたいて回る。

小屋には、良く燃えるように、木やそだを二階部分に置いておく。また、良い音がするようにうつ木もいれてある。

また、お供え餅にしいた半紙をつないで、道祖神の轆轤を各家で二つ作った。轆轤には奉納道祖神大笑何々氏と書いた。

また、この火で餅を焼いて食べると風邪をひかない、皮膚病にならないという。焼いたものを持って帰り、食べさせたりさわらせたりした。

七、十五日粥

正月十五日に粥を作った。カユカキ棒でかきまわし、今年の豊作を占う。飯つぶがつくほど豊作である。その後、カユカキ棒は床の間に飾ったが、田植えの時、田の水口に柳の箸と一緒に立てた。

正月十六日、まゆだまをお飾りから取った。取ったまゆを煮て正月様に供えた。朝食前にやって、供えたほかに食べた。まゆだまは、小さるか箕に入れた。

この日、小正月のお供えなどをかたづけた。

朝居にかけた十六段のものは、すずはきの頃までかけておいた。

ほかの木は、赤飯や餅を作るときのもしきにした。みずきは初年のときに使った。

八、その他

正月十八日には、十五日の小豆粥を取っておき、たして粥を作った。お粥をお湯で薄めて湯筒にいれ、子供が家の周りをこぎれることなぐ撒いた。長虫と魔除けである。

大寒の朝早く、炊きたての飯をもっていき、柿の木を鉈で、少し傷をつけて、「今年は成る木か成らない木か、成らねばぶったぎらぞ」「はいはいります」という。更に「そうかさうか」といい、柿の木の傷に糞の飯を付ける。

桑は蚕の命の元、みずきは火伏せ、かりんは銭をかりん、ニワトコは新芽の伸びが良く、身上が伸びる縁起の良い木だといった。



写真 56

九、ま と め

笹沢家では、小正月は養蚕の大あたりを願う行事として行われてきた。蚕にまつわる行事のなかでも、最も華やかなものとして、おこなわれた。

まゆだま飾りも、床の間の前に華やかに飾っている。どんど焼きが地区の行事として今も行われているのにたいして、家の行事は継承が難しい。

(井野修二)

新井豊家のつくりもの

一、概観

勢多郡東村小夜台は、渡良瀬川左岸の傾斜の地である。川ぞいにわずかに耕作地は見られるが、主たる産業にはなりにくいものである。林業や石材業に従事する例が多く見られる。花輪の集落からは川を渡りやや高台になる地に十四、五軒がまとまって位置している。地域の結びつきは強く、伝承としても良く残されている。つくりものは多種多様である。正月の飾り物も、歳神、エビス様、大神宮様の三つにあげるとともに、出入口、台所、井戸、納屋にも輪じめをあげる。その同じ場所にハナをあげる。歳神様のもものは大きく、道具も作りそなえる。

二、山入り

山入りは正月四日。アキの方の山にゆき、おがむ。木を切るのは十一日。方角を考えて良い方角（南など）におく。二日ほどおくとかわき具合が良くなり、ハナがまるまりやすくなる。木を切る時はオノの背を一たん水にかざしてから切る。やくよけになる。これはふだんも同じ。

三、木の種類

ハナには主にニワトコを使うが、ミズキも使う。つくりものには、ヌルデ（ノデンボウ）コアギ、ミズキ（ミズクサ）を使う。ミズキは門におくものを作る。

まゆ玉をさす木では、年神のまゆ玉の木はボク（ヤマクワ）、ナラ、シラハギ、を使った。ボクは山で根を切り、三年くらいで生えてきたものを使った。ボクをとりにつくるときは「ボクをむかえにゆく」と言う。（写真57）

仏壇のまゆ玉の木はシラハギを使った。

オシラ様、オカマ様のまゆ玉の木はナラを使い、まゆ玉を三十六個さした。オカマ様の松は、のどに骨がささった時に、それのどをさすのとれるという。オカマ様にはオシメはつけたままにしておく。（写真58）

座敷に飾るまゆ玉、家の外に供えるまゆ玉の木には、シラハギを使った。小枝に三



写真57 マユ玉の台木



写真59 工具



写真60 二段のハナを作る

62

カユカキ棒はヌルデで作り、長さ三

五、作り方

ハナは、二段と十六段を作る。十六段のものはフシで十六段になるものをとってくる。甘皮をむき、根元のほうから、手前にハナカキナタを使いながらハナを作る。(写真60・61)

玄関のハナはじめのものは、ヒトツバナで一段の長いものをつけた。(写真



写真62 玄関の小正月のかざり

ぶ、特に呼び名はない。
作る場所は特に決まっていず、イロリのまわりで作った。
道具は、ナタ、ノコ、ハナカキナタを使った。台には木の根を使うが一定はしていない。(写真59)

作ったものは紙につつま、きれいなところに着いた。ハナを売る市はなかった。



写真58 オカマ様の小正月のかざり

四、造る日、場所、道具
十二〜三日ころで、暦をみて神事良しの日を選
四センチのマユ玉を一個つけ、建物の数だけ作
った。そこには正月に松、オシメもかざった。水
神様(井戸)にもかざった。
アワボ・ヒエボはない。
箸の木(ハラミバシ)は、ヌルデ(ヌルデンボ
ウとかゴマ木「護摩木」とも言う)を使った。



写真61 ハナを作る

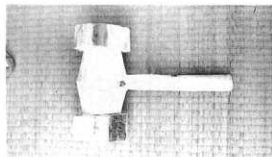


写真67 打出の小づち

家族の分は、年神様のタナにあげておき、十四日のアズキメシと十六日のオコワの二回使った。ヌルデをナタで割り、けずって作った。(写真63、67)

福俵は、小正月のかざりに使った材料ののこりをマキをたばねるようにはばっておいだ。作ったあとには小屋のすみにおいておいだ。(写真68)

カタナはヌルデの丸太で大小二本作った。刃の部分は皮をむき、柄の部分は皮に×の文様をつけた。大小には細長いケズリをつけた。作って年神様の下にかざった。

農道具は作らないが、ヌルデで打出の小づちを一つ作った。太いところを二切れで作った。年神様のボク

のそばにおいて。

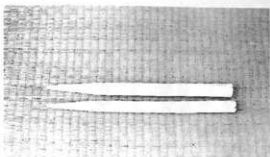


写真63 カユカキ棒

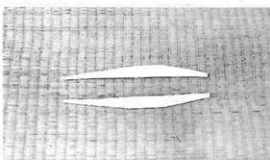


写真64 鋸

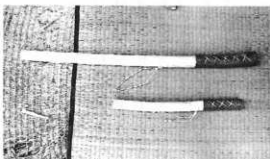


写真65 大・小の刀

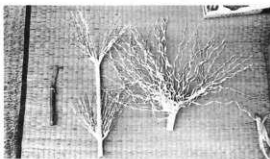


写真66 ヒトツバナと二段のハナ・工具

十センチメートルくらい。皮はむき、元のところを十文字にノコでしるしをつける。そこにマユ玉をつけ紙でくるみ、水引でしぼる。これは十五日の朝カユをかきませ、その後水口におく。アオノロを除くと言う。

ハラミバシはオミタマ様用の六膳と、家族数の二部の合計数作った。オミタマ様にはアズキメシをつくりものをつくる日の夕方作り、はらんだほうを外にして、ハラミバシを中央に一膳、まわりに五膳として仏壇にあげた。



写真69 神期の小正月かざり



写真68 あまった材料を儀にする

まゆだまは米の粉を使ったが、トウモロコシの粉も使った。粉は十二日ごろに昔は石臼でひいた。まゆ玉は十四日に作った。年神様には十六個大きなものをつけた。他は小さいものをつけた。作ったまゆ玉はショーギにいられておいた。まゆ玉の木はボク、ナラ、カシウハギを使った。ゆで汁は動物のエサにした。

六、飾りかえ、供え方

飾りかえは十四日で、玄関のミカンをハナにかえ、松をまゆ玉にかえた。

ハナは神だな(写真69)、年神だなの前柱に二本(写真70)、仏壇に一本、えびす様に二本(写真71)、井戸神に小枝一本、オシラ様に一本、山の神に小枝一本をおいた。

道祖神小屋はない。

年神様へは、ハナが二つついたものを一本と、ハラミはし、まゆ玉をつけたナラの木をおく。まゆ玉の数は五とか七の奇数をつける。小判形のものも八個くらいと、小さい丸いまゆ玉の白と黄のものを五十個くらいつけた。下に十六段バナと小づち、カタナ(大小)をおいた。小判形のもの、「ワカモチ」をつき、四角に切り、千両箱のつもりでさした。

エビス様には二段バナを二本、タイを二つつけてかさり、まゆ玉が五個ついたものを一本と、ごはんをかざった。

昔は、成木責めを柿の木にしたとの話がある。

七、小正月の行事との関わり

十五日粥では、カユカキ棒でませた。その時に、カユを吹いて食べると植えた苗がひっくりかえると言った。

馬屋肥は十六日に出した。



写真71 エビス様の小正月かざり



写真70 歳神さまの小正月かざり

まゆ玉は十六日にとつた。ザルに入れておき、のちひやして雑煮にしたが固かった。まゆ玉は養蚕にかかわるものと言つた。昔は天蚕があり、嫁に行く時は必ず天蚕の腰巻きを作るものだと言つた。

小正月の供えものは十六日すぎに片づけた。エビス様のは二十日ごろ、一番最後に片づけた。この日にエビス様がかせぎにゆくと云う。

カタナなどは小屋に入れておき、モシキにしたり、子供があそびに使つたこともある。ハシは食べるとイロリでもやした。

八、その他

暮の二十八日か三十日にモチをついた。昔から「ヒトイロモチはつくるな」と言い、ノリモチやトウモロコシモチも作つた。

松飾り注連繩飾りは暮の三十日に飾つた。正月の前日三十一日に飾ることは一夜飾と言つて嫌つた。

正月の供え物は四月にさげた。「タナサガシ」と言い、あげたものをまぜて、タナサガシのオジャヤを作つて食べた。

十一日はクワダテといい、麦メシを始めていた。それまでは米の飯であつた。また、畑に行き、七、三、五にサクを切つた。

初午は仕事をしてはいけなかつた。マメのカラをもやした。山に行つてはならず、行くと火事の災にあうと言つ、針仕事もいけない。初午の前の晩に、オカマ様のハナをウスに入れてカラウスをつくと、その音を聞いてオシラ様がおりてくると言つ。

ワラかざりは、年神様がミスじめで、エビス様が擬宝珠じめ、神だながゴボウジメの長いもの、物置、井戸、台所がワジメであつた。

(井野誠一)

藤生作十郎家のつくりもの

一、概観

藤生作十郎家は、桐生市南西の渡良瀬川扇状地中央部の笠懸村阿左美にある。

古くは畑作が主たる産業であった。当家の西方には大きな原がひろがっていたとのことである。

つくりものはまゆ玉が中心になっている。

何年か以前には、まだ何軒かつくりものを作っている家があったとのことであるが、現在は藤生家以外にはほとんどみられず、貴重な存在となっている。

二、山入り

山入りは話には聞いたが、山を持っていないので行わない家が多かった。

藤生家の西には、昭和のはじめの開墾まで、ずっと「ヤマ」になっており、当時は山入りというところに行った。

現在の桐生短大のところが山のはじて、ワラの宮があった。

木は根付きのものを使った。根を鎌で切り、家に持ち帰り、庭にかけておき、鉢にいられた。鉢は大原で買った。(写真72・73)

木は蚕が食べるボク(山桑)をとった。

座敷には、ムシロをしき、その上に鉢をおいた。木にさげるものは売りにきた。



写真72



写真73

三、木の種類

まゆ玉をさす木はボクで、十くらい作った。

神棚にはまゆ玉を十個くらいつけたものをあげ、便所、物置にはまゆ玉を三〜五個つけたものをあげた。便所、物置

用の木は、ボクの枝おろしたものを使った。
〔写真74〕

コヤシバにも「ハナの木」をおいた。三メートルくらい竹をとり、上のほうの枝に三〜五個のマユ玉をつけた。下の枝には「山桑」の細い棒で十センチくらいの長さのものをさした。
〔写真75〕

箸を正月に作ったことがあるが、木の名はわからない。

四、造る日、場所、道具

つくる日は一月十三日であるが、名はない。十四日にまゆ玉をつけてあげる。十六日にさげた。まゆ玉は座敷かお勝手で作った。

木はナタで切り、小刀か鎌でけずった。

五、作り方

カユカキ棒は、まゆ玉をさし、水口にさした。マムシよけと言った。〔写真76〕

箸は家族の数作った。長さはふつう。

まゆ玉は米の粉で、間のあるときにひいておいた。一升一合〜二升用意した。

まゆ玉は一月十三日に作ったが、当家は正月に餅をつかないので、かわりもなかった。米の粉をこねて、まるめ、うでて、水にいった。〔写真77〕

ゆで汁は土びんに入れ家のまわりにまいた。



写真76 カユカキ棒



写真74



写真77



写真75 コヤシバ用の「ハナノキ」

六、飾りかえ、供え方

飾りかえは十一日に行った。

まゆ玉かざりは、神棚、仏壇、えびす様、釜神様、稲荷様（わらのお宮）、八幡様（わらのお宮）には十個つけたもので、井戸神様、湯殿、便所、物置には三個つけたものをあげた。その他にあった馬頭観音にもあげた。

七、その他

当家は家例で正月の餅は作らない。一月の十九日につき、二十日にかけて、それを、かわりにした。かつて由良成繁様が小田原に行き、留守の時に、桐生城の戦があり、餅をつけなかったので、今でもつかないという伝承がある。

（井野誠一）

石綿信雄家のツクリモノ

一、あらまし

石綿家のツクリモノの中心はニワトコの木でつくるハナとカユカキ棒である。繭玉も飾っている。西毛や利根地方に比べれば内容は少ないが、木實めに古さを感じさせる。地区内の他家ではほとんど行われていない。

このように続いているのは、当主の伝統行事に対する姿勢によるものだろう。この傾向は市内で共通のものであった。

二、山始め

正月六日を山始めといい、自分の持ち山に行つて、ゴマメとおしめを供える。下草を刈つて、木の葉を集める仕事をする。この日は仕事の形だけである。木は切らない。なお、二月の山の木を切つて、まきにした。

ツクリモノ用の木は十一日と当日十四日の朝に切つてくるといふ。ニワトコとナラの木は十一日に切つて、十四日のハナをかけた。カゴキと桑の木は十四日の朝切つてきた。

道具と木はさみで、かかえてもつてきたあと、縁側においた。ハナには皮をむくのとむかないのがあって、白木で保管した。供えものはなかった。

十二様に進める木は榎を使った。繭玉をさす木は桑の木である。

三、モノツクリ

十四日がモノツクリの日で、おかさりかえといった。朝から始めて午前中かかった。庭にむしろを敷き、カケヤを台にして作った。道具は他にナタ、剃定ばさみ、ハナカキガマを使った。作るとすぐに飾つたので、特別な入れ物はなかった。ハナを売る市もなかった。(写真78)

ハナは二段のもので、家の中や神様に供えるものは、皮をむいた白いもので、墓地の墓石にそなえるものは皮をむかない黒いものだった。墓地にそなえる方が、数が多いのでそうしたのである。木の先から根もとの方向にかいた。(写真79・80)

カユカキ棒は根の方をこがらせ、先の方は十文字にワレをいれた。田の数だけ作つた。(写真81)
繭玉は、二三日前に石臼でひいておいた米の粉を使い、十四日にふかして、きした。



写真78



写真79



写真80



写真81



写真82

ハラミ箸、福俵、アワボ・ヒエボ、木刀、農道具は作らなかった。(写真82)

四、オカザリカエ

ハナは、家の中では、神だなや年神だな、仏壇、えびす様、釜神様、井戸神様、便所、俵の上に飾り、外では神社やお堂、便所に飾った。墓地では、自分の家の先祖の墓石に飾った。

マユダマ飾りは、十四日にふかして、重箱に置いておいたマユダマを、桑の木にさした。(写真83・84・85)
お飾り菓子を一三日前に売りにきた。繭や小判の形をしていたものを買って置いて、飾った。

五、道祖神とドンドヤキ

十四日の午後、子どもがリヤカーでお飾りを集めてまわった。おだちんをもらった。昔(明治の頃)は小屋を作ったというが、今はない。十五日の朝早く、日の出前にドンドヤキをした。もちを焼いて食べるとかせをひかないという。



写真83



写真84

六、十五日粥

正月十五日には小豆粥を作って食べた。この粥は熱くても吹いて食べてはいけないといわれた。吹いて食べると田植えに風が吹くという。女衆が早くに作

ってさましておいた。

粥をカユカキ棒で丸くかきまわした。割ってあるほうを中にいれてかきまわした。粥がついたままで、半紙で包み、水引きでしばって、神棚にあげておいた。この棒は、田植えの後、水口にさしておいた。病害虫除けという。

この粥を煮たなべをあらった水をやかんに入れて家の周りに切れ目なくまいた。魔物が入らないようにするためという。

写真85

七、マユカキ

正月十八日はマユカキといって、まゆだまをとって、片づける日である。小正月のお飾りもはずした。まゆだまは箕の中に入れた。ハナはおろして燃し木にした。カユカキ棒は水口にさしっぱなし。ならの木は、初午の日にまゆだまをふかす燃料にした。

八、その他

正月十五日に木買めをした。ナタで柿の木を切るまねをして、「なるかなんねえか、なんねえとぶったぎるぞ」といった。十八日には、粥を作った。十五日の粥を残しておいて、足して作った。

九、まとめ

県内の事例から比較すれば、簡単な内容ではあるが、前橋市全体からみれば、比較的よく残っている例になると思われる。しかし、地区内でも、もうほとんどやっておらず、この民俗も消滅しつつあるように思われる。

(井野修二)

板野豊作家のツクリモノ

一、あらまし

赤堀町では、昔はやっていた小正月のツクリモノは、すっかりおこなわれなくなっていたため、今回の調査は板野家で再現してくれたものである。

二、山入り

ツクリモノの木は、二〜三日前に切って用意する。特に山入りの行事はなかった。

ニワトコ、ナラ、ヤマクワ、エゴの木を切ってきた。(写真86)

三、モノツクリ

正月十四日、庭にむしろをしいて作った。ハナ、カユカキ棒、箸、まゆだま飾りだった。

ハナは、ニワトコの木を使った。専用の道具があり、それを使った。小さいものは、大正月のお松のところに飾るので、その数と同じだけ作った。十二段のものは十二天神といい、神棚に上げた。十六段は蚕だという。(写真87・88・89)



写真87



写真88



写真89

カユカキ棒はニワトコで二本作った。一方をとがらせ、もう一方は四つに割ってまゆだまをはさんだ。箸は真中が



写真86

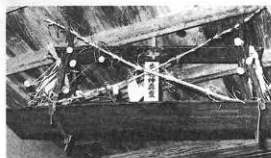


写真91

川神様のハナには、まゆだまを三つつけた。
マユ玉は米の粉で作った。十三日に粉をひいた。粉をこねて、ふかして作った。このとき若餅をついた。
歳神様のまゆ玉の木はエゴの木で、小さいまゆ玉を付ける。ならの木を代用することもある。餅を十ヶさす。これは山の神である十
様のわけだといふ。(写真91)



写真90

ふくらんだので、オクテバシといった。これもニワトコの水で作った。

四、オカザリカエ

正月十四日に飾り替えをした。ハナは正月のおそなえ飾りをしたころに供えた。門松のあったところには、抜いた穴に松を一段差し、ハナを付けてまた差した。
ハナを飾ったのは、神棚、歳神棚、仏壇、えびす様、釜鉾様、井戸神様、墓地、道祖神、神社やお道、山の神、川の神、巫神、便所である。(写真90)
墓壇はまごめて、十六日の暮まじりのときにあげた。道祖神や神社お堂は信仰する人があげた。

座敷には桑の木に大きいまゆ玉を十六つけたものを飾った。天井から下げた。(写真92)

まゆ玉飾りには、売りにきた飾り菓子をつけた。
ヤマクワの木は、根までとってきて、台にした。
福袋、アワボ、ヒエボ、木刀、農道具は作らない。

五、道祖神とドンドヤキ

正月十六日の飾り替えの後、その日の午後、子供たちがお飾りを集めて、餅や金ももらった。十七日の晩に焼き、まゆだまや餅をあぶって食べた。無病息災になるといふ。

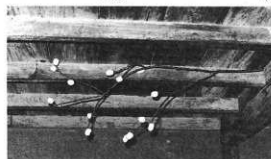


写真92

六、小豆粥

正月十六日に作った。カユカキ棒でかきまわし、半紙で包み、麻でしぼる。二十日えびすの風にあてないといった。かゆかき棒は田植えの時、苗代にさした。ズイ虫除けという。

箸はオタテバシといい、紙の鉢に餅を詰めて箸を立てた。

粥の洗い汁をまいた。これは火除けといった。

七、その他

まゆかきは十九日である。まゆ玉をとって、ミソこしざるにいれ、えびす講にそなえた。

小正月のお供えやお飾りは十六日にかたづけた。ハナはドンドロ焼きでもやした。

八、まとめ

しばらくやっていたいなかったため、再現にも時間がかかった。しかし、この調査がきっかけでまたつくようになったとのことである。

(井野修二)

永田隆一家のツクリモノ

一、あらまし

藪塚本町は江戸時代は笠懸野といわれたところで、用水の開削により開けた場所である。したがって、住民も近くの村から新田開発で来たという。農業は畑作中心である。民俗は行事全体としては、東毛の民俗圏にはいる。

二、山 始 め

正月六日に、自分の山にいった。おさこ餅などを供え、今年も山火事などないようになっておがんだ。
ツクリモノの木は十四日に切ってきた。ニワトコやウツギ、オッカドの木を切った。ニワトコは庭に植えてあるので、毎年それを切ってきた。

三、モノツクリ

ハナは正月十四日のお飾り替えの日に作った。ケズリナタとハナカキナタを使った。(写真93)

二段ハナは、ニワトコの木を削ってつくる。さげやすいように、上へ下げる輪を作る。大正月のお供えの場所に置くので、数が多い。(写真94・95)
墓地に飾るハナは、黒皮つきたった。

(写真96)

ニワトコの長い枝を一本取って、一方は十六段、もう一方は十二段にハナ

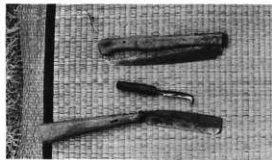


写真93

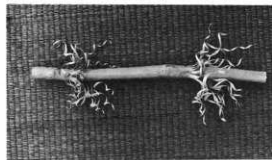


写真94



写真95



写真97

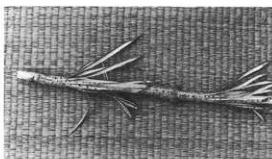


写真96

をかいた。これは神棚のまえのなげしに供えておいた。(写真97)

カユカキ樺は、オツカドの木の先を四つに割り、まゆ玉をはさんだ。二本作った。

箸はオツカドの木で作るので、オツカド箸という。家族の数に一人分足して作る。長さ(一)二十四センチ、太さ一センチほどもあり、まねことだけで、実際は普通の箸を使った。

アワボ・ヒエボは町内にあったが、永田家では作っていない。

木刀、福俵、農道具は作らない。

作ったものはすぐに飾るので、特別のいれものなどはなかった。

まゆ玉飾りは、暮のうちの粉ひきからはじまる。米の粉とくす米をひく。くす米は黒くなる。大きい繭の形を十六と十二個、丸餅を十二。丸餅はうるつ歳は一つ加えた。ほかには特別の用事はなかった。しょうぎにいらてさした。新しいしょうぎの使い始めた。

木はヤマクワ、ナラなどのボクを使ったが、今は柿で代用している。

四、カザリカエ

正月十四日が飾り替えの日だった。

ハナは、次のところに飾った。

神棚、歳神棚、仏壇、えびす様、釜神様、井戸神様、墓地、石造物、神社やお堂、オシラ様、山の神、稲荷社、便所、倉、作業所、馬小屋、味噌倉。(写真98)

十六段と十二段のハナは、神棚の前のなげしに供えておく。(写真99)

100
まゆだま飾りは、まゆだまを小枝にさして家の神様やお松のあるところ上げる。桑の株の枝に十六個の繭の形のまゆだまをさして座敷の天井に吊す。

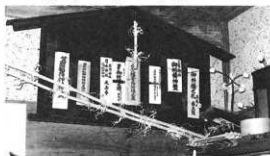


写真98



写真99

五、オミタマサマ

オミタマ様が、先祖であるという。供えるだけの米を年男が鍋にいれ、豆がらをたいて白飯を煮る。その飯をオテマルにし、十二個作り、ウツギの木も十二個作る。

昔はウツギの箸を十二本作って一本ずつさし、お膳に紙をしいてのせ、オミタマサマに供えた。今は略して、鍋で煮た飯へ十二本の箸を立ててそのままオミタマ様に供えている。

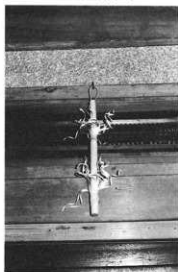


写真100

六、道祖神とドンド焼き

大正月のお松を子供たちが各家を回って集めてあるいた。上級生が指図し、下級生が荷車をひいた。このとき、各家からお金をもらい、菓子やおさげを買った。十五日に小屋を作り、十六日の晩に焼いた。この火で餅を焼いて食べるとはやり病にかからないという。昭和十年ころまでやっていた。

七、十五日粥

小豆粥を作った。カユカキ棒で唱え言葉を言いながら粥を掻き回した。カユカキ棒は半紙に包んで神棚に上げておき、あとで苗代の水口に立てた。

粥を吹いて食べると、田植えに風が吹くといった。

粥を供えたお鉢の洗いを、ムカデ、蛇除けに家の回りにまいた。

八、その他

十八日には、十八粥を作った。十五日粥を残して作った。

まゆかきは十七日の朝。とったまゆだまはお鉢に入れた。

飾りものは二十日正月すぎに燃やした。ハシはとっておいた、翌年削って使った。

九、まとめ

永田家では、ものづくりはきちんと行われている。特にハナはきちんとつくられ、飾られている。

(井野修)

須永利隆家のつくりもの

一、概 観

須永利隆家の小正月のつくりものも、現在はマユ玉飾りを中心としたものになっている。同氏は隣接の柏川村月田出身であるが、今回はつくりものを再現していただいた。

その中には、山始めの石宮への供えもの、十五日粥の代掻きを模したカユカキ棒の用い方等、昔ながらの習俗を伝える部分も見受けられる。また、十四日のワカモチを細かく切り、ヤマクワの木に数多くさすことがあるが、マユ玉との両方を作る家は数少ないという。そして、年神様へのお供えの御飯にハラミ箸をさす例など、地域的な特色をうかがい知ることできる。

二、山 入 り

山入りの日は、山始めともいい、一月六日に朝飯を食べてから出掛ける。山上の熊ノ山など東方の山から木を持ってきたが、現在は、諏訪神社方面へ出掛けている。

諏訪神社の山神宮野石宮には、必ずイワシを「尾とオサゴを半紙を敷いてお供えする。」(写真101)御幣などは特にしていない。

木を伐る時は、一本目だけは東方に向って伐っている。ミズブサはノコギリを用いて伐るが、ヤマクワやクワの木など、カマを使う場合も多い。(写真102)

一、二カ所をワラ縄で縛り、荷車が入るのが早かったので、牛ウンソウが使われたが、馬で小荷駄にしたり、六尺もあるシヨイダイで運んできたこともあった。現在は、貨物の自動車運んでしまっている。(写真103)家へ持ち帰ってからは、バラックなどの隅に立て掛けて置いておくが、特にお供えものなどはしなかった。(写真104)



写真101 山神宮の石宮にイワシとオサゴを供える



写真102 カマを用いて木を伐る



写真103 伐った木を束ね貨物車に載せて運ぶ



写真104 バラックに立て掛けられたつくりものの木

三、木の種類

つくりものに使用する木では、ハナにはニワトコを、ハラミ箸などにはニワトコかノデンボウを用いている。

マユ玉をさす木では、十六デンジ（十六タマ）は、クワのカブツかミズキを使うが、家内のマユ玉はエゴの木を、外まわりにはミズキの太いしっかりしたものを利用している。

ザシキには、クワのカブツで十六本のエゴの一本だけを掛けて吊すようにして、マユ形の大きなものを十六個飾るようにしている。

四、作る日・場所・道具

小正月のつくりものを作る日を「ものつくりの日」という。一月十四日には、モチつきをし、エゴの木のエダゴシラエをしてマユ玉なども作るが、その後、軒下、エンガワなどの暖かい場所で作くりものをしていく。

道具としては、代々伝えられたハナカキナタを主に用いるが、ナイフ・ノコズリ・ナタなども場合により使用している。ハナカキナタは、金物屋（大間々の土田金物店）で売っている。台には、ありあわせの木で間に合わせている。

作られたハナは、オカザリカエにできたそばから供えている。カユカキ樺は、年神様のタナへ置いておくが、マユ玉も入れておいた。

オシメやミカンなどの飾りは、一月十四日の朝早く下げるようにしている。ハナなどを売る市は特になかった。

五、作り方

十六バナは、ハナカキナタで手前へカいて作るが、ニワトコのフシのところへハナを付けている。ニワトコの表皮を付けたまま作っているが、家によっては剥いた後にハナをカクところもある。（写真105）

カキバナは、何段かカいておいて、キバサミやセンチで二段ずつ切り落とすようにして作っている。

カユカキ樺には、ニワトコの太さ（一五）センチメートル程のものを用いる。カマやナイフで表皮を剥



写真105 ハナカキナタでハナをかく



写真106 マユ玉作り

き、先端を四つ割りにし、一方をナイフで尖らせる。これをノメにするという。ハラミ箸は、ノデンボウの木を八寸位の長さに切り、それをナイフで四つに割り、外側を厚く、内側を薄くするようにし、両端を細く作っている。家族の分だけを作った。十四日には、年神様へオワンに御飯を入れ、そこへ一膳この箸を立ててお供えした。

福俵・アワボヒエボ・木刀・農道具などのつくりものはしていない。

マユ玉には、米の粉を用いて一月十四日に作ったが、粉挽きは暮れのうち、細かい仕事なのでホコリがたないよう静かな日を選んで行った。石臼で挽き、フルイでふるったが、質挽きなどもやっていた。蔵沢川には、一旦精米するためのクルマ（水車）が、昭和二十二年頃まであった。

一キログラムの粉で五十〜六十個のマユ玉が作れたが、すべてマユ形をした中央の括れたものになっている。写真106 十六デンジは、一キログラム分の粉を使って作っている。家内のマユ玉は、エゴの木に二十〜二十五個程付けるが、外まわりには、ミズキの木に三個か五個を飾り付けている。

ゆでたマユ玉はショウウギに入れ、くっつかないようにウチワであおいでさました。写真107 ゆで汁は、カキ・クリヤボタン・シャクヤクなどの花木に、バケツでかけていた。



写真107 マユ玉をゆであげる

一月十四日の朝にワカモチをつくが、モチをノシて長くしたものを、一・五センチメートル角にサイの目に切り、ゆでてヤマクワの木に数多くさしていた。タナ、ザシキ、トコノマ、大神宮様などに供えたが、マユ玉とモチの両方を作る家は少なかった。

六、飾りかえ・供え方

お飾りかえは、一月十四日の朝おこなっている。十六ハナは、年神様、大神宮様、トコノマにそれぞれ一本ずつ供えている。家の中には、二段のハナを供えるところはない。

外まわりには、オマツを立てたところへは、一段のハナをお供えしている。写真108 屋敷稲荷、カドグチ、ニワには、それぞれ二本。蚕室、井戸、堆肥舎、田畑などには一本ずつ供えている。以前は、カワダナやお墓へもお供えしていた。道祖神などへお供えする人もいる。



写真108 カドグチのハナとマユ玉飾り

ドンド焼きは、戦前までであった。中学生のオヤカタを中心の子供たちがリヤカーで、オマツやオシメ、ワラなどを集めた。十四日にもらい集めて、十五日の早朝に行った。木を三叉にし、タケを用いて周りに集めた小屋を作ったりした。

ドンド焼きの火で焼いたノシモチを食べるとカゼをひかないといわれた。大人たちも子供にミカンなどをふるまった。

水祝いは特になかった。

マユ玉飾りは、大正月の飾りをしたところへは、小正月のものもすることにしており、シメ飾りのところへ一組ずつマユ玉を供えた。仏壇、エビス様、物置、牛小屋などにも供えた。オカッテの上のエビスダイコクへは、オシメを飾り、マユ玉の数の多いものを一本飾り付けた。(写真109)

十六バナのところへも数の多いマユ玉飾りをした。(写真110)

家の中のマユ玉とともに飾るカザリ藁子の行商が戦前までできていた。エビスダイコクやコバン、コツチ等色々な形のものがあり、色も赤、白、黄、緑、桃色と様々だったという。

二月の初午にもマユ玉を作っていた。

成り木責めは特になかった。

七、小正月の行事との関わり

オシラマチ、オミタマサマとつくりものは特になかった。

一月十五日の小豆粥では、カマの中のカユにカユカキ棒二本を代掻きと同様にして、縦横に残く先に付けたマユ玉が入るくらいにしてかきませた。その後、半紙で巻き、麻ヒモで一カ所縛り、年神様へ上げておいた。五月に苗代の水口へそれぞれ供えたが、ナエマの数だけカユカキ棒があった。ナエマの虫封じにするといった。

田植えの時に苗が倒れてしまうので、カユを吹いて食べてはいけなさとされた。

十八粥のゆで湯をヤカンに入れ、屋敷まわりに右周りにして撒いた。ゆるいカユなので、「田植えをする」などといったが、水に困らないようにという。

十八日の午前中にはマユ玉を下げるが、マユカキといっている。ショウギやカイコのクワクレザルを使ってマユ玉を入れた。



写真110 正月餅と十六バナ・マユ玉飾り



写真109 エビス、ダイコクのマユ玉飾り

馬屋肥も戦後間もなくの時期までは出していた。

小正月の供えもの・飾りものの片付けも一月十八日に行うが、ハナや箸等も一緒にまとめて隅へ置き、後に燃してしまっている。

正月のカザリダナは、一月二十八日に片付け、しまい正月となるが、カユカキ棒等は神棚へ置いておかれる。

(なお、山入りについては、須永氏より貴重な写真の提供を受け掲載することができたことを付記しておきたい。)

(神宮善彦)

〈写真101〉山神宮の石宮にイワシとオサゴを供える。

〈写真102〉カマを用いて木を伐る。

〈写真103〉伐った木を束ね、貨物車に載せて運ぶ。

〈写真104〉バラックに立て掛けられたつくりものの木

〈写真105〉ハナカキナタでハナをかく。

〈写真106〉マユ玉作り

〈写真107〉マユ玉をゆであげる。

〈写真108〉カドグチのハナとマユ玉飾り

〈写真109〉エビスタイコクのマユ玉飾り

〈写真110〉正月棚と十六バナ・マユ玉飾り

石橋藤三郎家のつくりもの

一、概 観

石橋家の小正月のつくりものも、現在ではマユ玉飾りだけとなっている。このため同所の片山芳雄氏（大正二年生）に協力していただき、ハナを作っていたのだが、片山家でも道路の整備拡張等に伴い、庭先に植えてあったニワトコの木が取られてしまったため、今年でつくりものも止めてしまおうという。何かをきっかけとして作りものは縮小していく傾向にあるように思われる。（写真111・112）

そうした中で、マユ玉飾りの十六ゼンジは、ヤマクワの木にマユ形を十六個と、他にカネダマトと呼ばれる丸形のを余分に一つ付けている点で特長づけられる。（写真113）また、柏川支流の小川のカワダナと呼ばれた洗い場が設置された所へもハナやマユ玉飾りが供えられたといい、この地域の特性が出されている。

二、山 入 り

一月十四日のオカザリカエの二、三日前にエゴの木を裏山へ採りに行っていたが、屋敷の隅にもニワトコが植えてあり、それを使っている。

一月六日の山始めには、クスカキやシバカリに行っていたが、幣束とオサゴを供えてきた。

木を伐る時は、ナタガマを用い、ナワで束ねて背負って運んできていた。

家へ持ち帰ってからは、エンガワなどに置いたが、特に供え物などはなかつた。



写真111 柏川村月田付近の景観



写真112 ハナとマユ玉作り

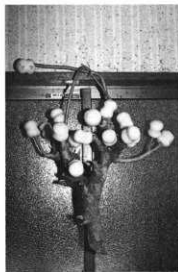


写真113 十六ゼンジ



写真114 ハナカキナタ

三、木の種類

ハナには、ニワトコの木が使われている。
マユ玉をさす木は、エゴの木がよく使われるが、十六センチには、ヤマクワの木を掘り出したものを用いられる。

カユカキ樺などにもニワトコの木が用いられたが、シオマメの木を切つて十二本(一年)のオハシを作つたこともあった。閏年の時は、十三本とする家もあった。小鉢にのせた御飯の上に十二本のハシをさして、オタナへ上げていた。

四、作る日・場所・道具

小正月のつくりものをする日は、一月十四日と決つていた。ハナカキをするとはいうが、特に呼び名はなかった。ワカモチをつくり日でもあった。以前は、一夜飾りはしないなどといつていたが、作つたものはすぐに飾られることが多い。大間々の表通りの「二・七の市」、大胡の「三・八の市」などがあったが、昭和二十年頃までは、十二月の市でハナを売つていたことがあった。また、ハナカキナタは、大間々の鍛冶屋で作つていた。

五、作り方

二段のハナは、ハナカキナタで、ニワトコの木の高いものを二段削つてはノコギリで順次切つていく。(写真115) オカマサマに供えるものは、ニワトコの十二フシ(芽)のあるところの表皮を剥くようにして作る。(写真117) ナタで皮を剥く場合もある。

カユカキ樺は、ニワトコの木の新芽を二つ付けるようにして適当な長さにノコギリ



写真116 二段のハナ



写真115 ハナカキ

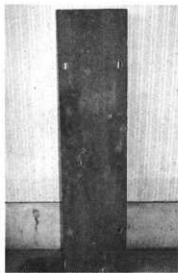


写真119 正月棚に使われた棚板

飾りかえは、一月十四日の朝から行われた。ハナは、オカマサマ（カマドの神様で火伏せとしてオマツも供えられた）だけには、長いものを供えた。年神棚へ四つ供えるほか、神棚・仏壇・エビス様・井戸神・墓地・道祖神・コカゲ様・カワ神様（ナベ、カマなどを洗うカワダナが五、六年前まであった）などへもそれぞれ一つずつ供えた。ドンドン焼きは、大正中期頃まで行われていた。ワラ・シメ・お飾りかえのマツなどを持ち寄り、空き地に小屋を作った。小屋の中で、ナベでコンニャクを煮たり、モチを食べたりした。子供たちも各家をまわって、お金を買ったりした。水祝いは特になかった。

六、飾りかえ・供え方

を作った記憶がある。それを盆棚の下の皿などに入れて置いた。マユ玉は、米の粉を用いて一月十四日に作られた。歳神様や神棚には、長いエゴの木に中央部の括れたマユ形のものをつけた。（写真118）十六センチには、前日までに探ってきたクワのカブツにマユ形を十六個とカネダマと呼ばれる丸形のものをつけていた。（写真118）ザルやボールに入れてきすと、スジはつくけれどもイキがぬけるので都合がよかった。マユ玉を作るときはマユゴを作るといっている。マユ玉のゆで汁は、そのままとっておいて、さめてから土びんやヤカンにうつし、カキ・うめ・ピワなどの成りものの木にかけた。オカザリカエの日にワカモチをつき、ヤマックワの木に小さくしたものをさしてザシキに飾っていたこともあった。



写真117 十二段のハナ（部分）

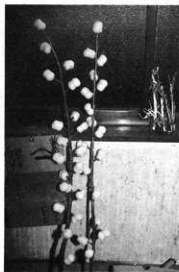


写真118 エゴの木のマユ玉

りで切り、先をナクで十文字に割る。また、一方をツノ状に尖らせる。ハラミ箸・福俵・アワボ・ヒエボ・木刀などは作っていない。農道具は、小正月には作らないが、かなり以前、お盆の時に、ナスやキウリの馬と一緒にエンガ・テンガ等

一月十六日には、家内のウマゴイダシがあった。大正期頃まではやっていた。マユ玉も飾られていた。オタナ（正月糰）をアキの方（重方）へ向けて吊していたが、大神宮様と歳神様とが祀られ、鳥居が両脇に付けられていたが、柳の四隅にマユ玉飾りが四本供えられた。二十年前までのことだった。（写真119）暮れの三十日にザシキの真ん中に吊るし、一月末まで置かれたが、お飾りかえまではシメ縄が飾られ、その後、鳥居に縛り付け万燈のようにしてマユ玉をたくさん下げた。お燈明をあげ、お雑煮を五日まで毎朝進ぜていた。

トボグチ・イナリサマ・イドガミサマ・カワダナ・ベンジョ・ソトウマヤ・タイヒバ・墓の入口・墓戸屋などの外まわりへもオマツやコジコメと同様に、マユ玉を二つ位付けた小さいものを供えた。（写真120）十六ゼンジは、オカッテのシツに吊るしておいた。

成りものの木にナタでヒツカゲを付けて「カキ、ナレナレ。ナラヌト、ブツキルゾ。」と唱えたりした。三十年位前までのことだったという。

（カミナリで火事があった際、オマツに火をつけて振っていると自分の方へは火がまわってこないといわれた。）

七、小正月の行事との関わり

一月十五日には、お雑煮でお祝いし、十六日の小豆粥では、田圃の数だけ作ったカユカキ棒を用いた。唱え言葉は特にないが、心に念じるものはあった。タナにお供えした後は、取っおいて田植えの際ナエにさしておいたりした。蛇・ムカデよけに、洗い汁をまくこともあった。

また、十六日には、カユの中に飾ったマユ玉を二、三個取って入れた。これを吹いて食べると、田植えの際に風が吹いてナエが倒れるとされた。十六日の墓参りは、今でも必ずしている。馬屋肥を出したこともあった。

十八日には、十六日のカユを温めて食べたりした。

マユカキの日は一月十八日で、もいだマユ玉はワタモノに入れ、イロリのホドにくべて焼き、サトウジョウウエで食べたりした。

小正月の供えもの、飾りものの片付けも十八日に行われ、まとめて燃やされたりした。二月の初午用として、木をそのままとっておいて、十六個のマユ玉を作って供えたりもした。カユカキ棒などは、オタナにマルいてナエマの数だけ束ねておいた。

（写真11） 柏川村月田付近の景観

（神宮善彦）



写真120 カユカキ棒とマユ玉飾り

- 写真112 ハナとマユ玉作り
写真113 十六ゼンジ
写真114 ハナカキナタ
写真115 ハナカキ
写真116 二段のハナ
写真117 十二段のハナ(部分)
写真118 エゴの木のマユ玉
写真119 正月棚に使われた棚板
写真120 カユカキ棒とマユ玉飾り

織村政一家のつくりもの

一、はじめに

織村家は、専業農家で、現在はキュウリとランのハウス園芸を中心とし、三代三夫編という四世代家庭でもある。年中行事はできるかぎり伝承してきた〔写真12〕というこゝで、今日でも三ヶ日の年男の役（料理をして供えものをする）なども守っており、うどん家例が続いている。

二、正月の準備

大掃除

家例として十二月十三日にやる。十年ほど前に家を新築する前は、神仏を外に出し、戸障子を外して、タンスも移動させ、仏壇のままできれいにした。すす竹は、篠竹一本を三か所しり家の内外を掃く。仏さまは箕の中に入れて外に出す。掃除が終わって入れる時は大神宮さま、次いで仏さまの順になる。

ヤカリ

大掃除より前に、裏の川岸から刈って来て、その中からよいものをぬいて七十、八十本を束にしておき、

ヨシズを編む。

クユイといって、竹垣を編む。

タナ作り

二十六日ごろ作る。昔はザシキに、その年の方をみて作った。（現在は床の間につくりつけて作っている）。オタナのシヤク（守法）は、約七十五センチほどで、毎年古いものを尺棒として長さをきめた。前年のものを屋根の上に放り上げておくので、それが落ちたらヌキの間にさして保存しておいて利用したりした。幅、奥行とも同じ正方形で、ヨシを一本ずつ重ねて編む。二十三通りから二十五通り、二十七通りぐらゐまで、奇数の編み数で、中央の奥よりのところにはわら束をしりつけ、ここに御幣をさして立てると仕上がる。竹でつくった柱を毎年使用してつるし、ヨシゴをのせてつるした。



写真121 正月棚（神棚を使う）

モチツキ

二十八日か三十日、この日にオカザリナイ（シメナワ作り）をするが、お供え分をとったとき汁でわらを浸すことになっている。

大晦日

ごはんをそば（ミソカツバ）、あるいは（あるもの）で間に合わせるといい、しょうゆ汁で、カツプシのダシにする。

三、正月

うどんの家例

正月三日は餅は食べられない。食べるとオデキ（できもの）になるといって、うどんの家例である。年男（主人）の手打ちで、ヒモカブの太いものをゆで上げておき、つけ汁で食べるのではなく、煮こんで食べた。暮のうちにアブラゲ、大根、人参を煮出して汁を作っておき、ウチイレ（もりコシといっているが煮こみのようなもの）にして食べる。昼は残りごはん、夜は新しく炊いためし。

おたなさがし

四日にする。三が日の間供えたものを下げておじや（雑炊）にして、餅を焼いてその中へ入れて食べる。雑煮ではない。

オセチ

親せきの間で年始の日がきまっています、磯村家では四日がオセチといい、みんながいつべんに来た。その日に酒を出し、おしるこ、そばを出した。年始客は、ショウガマと手ぬぐい一本とか、半紙の三帖と手ぬぐい一本などだった。オセチ料理はフナの甘露煮、スズメ焼き、コブ巻、里芋、きんぴら、切りいか、数の子、大根と人参のナマス、ようかんなどカサネ（重箱）につめた。

山入り

六日朝、オカザリを下げて、おそなえを上げて、山で拜んで来る。

畷入り

十一日、オカザリと松を持って畑へ行き、三本ウネを立て、まん中に松を立ててオカザリをつけ、一升ますの米、切餅を三切れ供えてから、白米をノボリになるようにまき、餅をつけて「すみずみまでよくできるように」松の木のすみずみにまいて終る。残りの餅は持ち帰って焼いて食べるし、米も炊いて食べる。



写真123 カユカキ棒とオニタマの箸（箸はウツギで作る）



写真122 ハナツクリ（皮ごと削りをつける）

四、モノツクリ

十四日にする。ハナギ、ハナノキはニワトコのごとで、昔は家のまわりに植えてあった。昔は一月八日に館林の初市で、いろいろな店が出る中にハナを売りに来る人がいて、その人からハナを買い、これにハナギの棒をつけて、マス竹の竹を使って仕上げた。

ハナ

買って来たハナと、ハナギを一寸（六センチ）くらいに切ったものの先にさしたものを十三本くらい作り、正月のオカザリ（松カザリ）を上げたところの全部に上げた。いまはハナ売りは来ないので、芽のついたものと、芽のないものとを一本ずつ、竹にさしたものを作ってかざる。けずりはない。

十六ハナ

ハナギのニワトコの長い枝を、皮のついたまま、芽を一段としてそのまま刃物で手前に削って十六段にし、神棚の前に上げる。長いままの枝で売っていたこともあり、それを買って来て上げたこともあった。

（写真122）

カユカキ棒

ニワトコの木の太いのを二本使い、下方は削らず、上を十文字に割る。けずりはない。（写真123）
堆肥にたてたもの

名前の記憶はないが、笹を切ってきて、これに、ハナと棒をハナギで作る、たくさんにつけたものを作る。作物にハナがたくさんつくように、実がたくさんつくようにというので、多くつけるほどよいとして、堆肥の上に立てた。近年は作ったことはない。

ハラミバシ

作ったことはない。

マユダマ

マユダマは、丸いものはほとんどなく、まゆ形にくびれをつけて作る。また戦争前はワタノハとよぶものを作った。これは丸くしたものの下の方をにぎって上をつぶすようにし、指でおさえて花が開いた形にしたもの。近年はキューリの形の長いものを作ったりして、マユダマと一緒に飾った。（写真124）



写真124 マユダマを供える

オカザリカエ

モノツクリとオアカザリカエは一緒のようなもので、マユダマは十三日夜に丸めて作り、十四日朝、ふかしてさす。マユダマ木も十三日に切つて用意した。ケヤキの枝がよいが、ヤナギも多く使った。

五、小正月

ドンドンヤキ

十四日夜、鎮守さまの庭でやった。子ども達がお松など集めて、長い竹を芯にしてお松を積み上げ、オカザリ(シズ)を下げて夕方までに用意したものを、村人が集まったところで燃して、餅を焼いて食った。餅を食うと無病息災でいられるといった。現在は屋敷鎮守の前でオタキアゲ(火を炊く)をする。

オニダマ

十四日朝、ごはんを炊き、おにぎり十六個を作り、ウツギの枝を十六本、皮をむいて、おにぎり一つ一本ずつようじのようにさして重箱に入れ、仏さまに供える。(写真125)オニダマは二十日の風に合わせないといつて十九日に下げ、昔はオシヤにして食べた。近年は牛の飼料にまぜてくわしてしまう。ウツギの箸はヤナセ(流しのタメ)のまわりに立てるとミミズがわかないという。

十五日粥

十五日朝、小豆粥を炊いて、カユカキ棒の割れめの餅をはきみ、粥の中を時計の針の反対方向に三回まわしてから供えて食べる。熱くても吹くものでないといひ、吹くと棉の花がとんでしまうという。ハラミ箸はなく、ヤナギ箸で食べた。この粥はハナガユともいわれた。

十五日粥の残り洗い水、神に上げたオシラキチョコを洗った水は、家のまわりにまくとナガムシ(蛇)が入らないといわれた。

ハナ粥

やったことなし。

二十日

ハナは十九日に下げる。オタナは二十日正月に外して屋根に上げる。

夜エビス講をする。チャブ台又は机の上にエビス、大黒を祀り、飯、けんちん汁、カシラツキ(サンマかイワシ)を臍立てして供えるとともに、ザッコ(フナなど)を一ひき、どんぶりなどに入れて供える。



写真125 オニダマ様のお供え ウツギの箸を1本ずつさす

魚が好きだがらといわれカケバナとよばれる。翌朝井戸の中へ放した。

六、おわりに

オシラマチのような行事はまったくみられず、養蚕の関わりが薄いようであるが、農道具やハラミバシもない。ところがワタノハナにみられるように東毛らしきが出ている。十四日のオカザリカエでは、取り外した松かさりのオカザリ（モリハギ）をとってひとまじめにして、屋敷内のナリモノ（桶でも梅でもキウイでも何でもよい）の木に吊るして、実のなることを祈願する。これは今日でもやっており、ハウス栽培のキュウリのつるにしばりつけることもやっている。（写真

写真126 梅の木に吊り下げられたキリハギ（正月のシメを片づけてつるす）

126・127）
カユカキ棒は、十五日粥の後は大神宮と年神櫃の両方に一本ずつ上

げておき、後で処分した。年神様に上げたハナはとっておいて、魚の骨をのどにさした時は「ウノド、ウノド」といってのどをさするとされるといわれた。



写真127 ハウスのキュウリにつけられた正月のシメのキリハギ



佐藤敏夫家のつくりもの

一、はじめに

佐藤家は、平地の中の専業農家として、米、麦を中心に養蚕もやっていたから、近年までは行事をいねいにやって来た。町村合併のあった昭和三十年ころまでは、新暦でやる正月と、アイノコ（月おくれ）旧暦ではないので（こういう）でやる埼玉の方とのまさりあったような正月をやって、両方でお客に行ったり来たりすることがあったという。今年は、都合で小正月のつくりものをしないので、聞きとりをした記録を報告することにした。

二、正 月

大掃除は、暮もおしつまった日に都合でやる。二十日ころ、ヨシ刈りをする。谷田川の川原で刈り、よいものを選んで皮をむき、そろえてオカザリヨシを一束作って玄關前などに立てておく。これは二尺五寸くらいの長さに切りそろえ、なわで編んで、これを正月の八丁ジメにつけて飾る。一夜かざりはしないと、間に合わない時は元日にするという。

三ヶ日は雑煮をしないで、朝はウドン、夜はメシときままっている。正月は四足は使わないという家があり、ウドンの汁にはネギ、人蔘、ホウレン草の具で、供えるにはオシラキで上げることになった。

山入りは四日にやる。三ヶ日は山に入るなといわれる。お供えは八日に下げる。

七草はお粥で、ナズナが代表の草で、「七草ナズナ、唐土の鳥が、日本の鳥と、日の土地に、渡らぬ先に、スットントントン」と歌ってやっただけという。

餅入りは十一日、コダナ（御幣）を持って田（畑）に行き、おみきとかがみもちを上げて帰る。上げたものは下げろといっておみきを飲んで来る。

三、小 正 月

モノツクリ（十四日）

ハナギ（ニワトコ）でハナを作る。昔は削ったようだが、近年はコダナとよぶものを作っていた。ハナギの芽と芽の間の皮を小刀でむき、一本は芽つきで短く切り、一本は芽のついていないものにし、竹を割って、先を一つ割りにして先端を削ってさして作る。これはコダナには全部さすことになっている。

カユカキ樺は、ウツギの太いので二本作る。長さは五寸（十五センチほど）にし、先の方は四つ割り、皮はむいておく。

マユダマも十四日に作る。米の粉をこねて、マユダマはまゆの形とし、まるいものは五穀を表わすという。丸くしたものを上から押しつけて、まん中がへこんだかぶと状のものを作る。ワタノハナとよぶもので、昔は2〜3反歩（二〜三十アール）も棉を栽培していたからさかんに作られた。餅はさすことはない。

マユダマをさす木は、けやし、柳、かしの木など、家によって違ったが、かしの木にさすのにぎやかだった。

オニタマ

十四日夜、ごはんを炊いて、十六個にむすんで重箱に入れ、ヨウジ（ウツギの枝）を一本ずつ立てて、仏壇に供える。

十五日がゆ

十五日朝、粥を炊き、カユカキ樺でかきまわしてから、一本は年神棚に、もう一本は仏さまに上げておく。かゆは熱くとも吹いてはいけないと注意されるが、これは「ワタノハナを吹き落とすから」といわれる。これは東上州の特色である。

処置

マユダマも、ハナも「二十日の風にあわせるな」といって、二十日の朝早くまでに一緒に片づける。マイダマは箕に入れてとる。これは焼いて食べるもので、昔は養蚕の時に食べたものである。ハナも、カユカキボウも十九日に下げた。正月様のオタナは、こわして屋根の上に乗けたもので、昔は草葺き屋根の上にくつも上がっていたものである。近年は燃しているが、二十五日が天神さんの祭り（屋敷鎮守様）なので、それにも関係するという。

四、おわりに

佐藤家では、ハナとはいふものの、ケズリは入ったものは作られていない。ハラミバシモナク、エンガ・テングなどの農道具も作られていない。東上州の特色とみられるワタノハナがマユダマの中に加えられているが、赤城南麓でみられるモチバナはない。

近年、生業の変化もあって、略式になり、今回の調査では実際にやることはなく、かつての事例の聞きとりだけになった。

（阪本英一）

吉田嶽蔵家のつくりもの

一、はじめに

吉田家は、館林市日向で二ヘクタール余の水田を耕作する専業農家であるとともに、屋敷内に御嶽山のみそぎ道場を持ち、同教の先達の家でもある。吉田家も三代三天婦、四世代同居の家庭であり（現在若夫婦は近くに住んでいる）、伝統の行事をていねいに行ってきた。暮にはセチ米として新しい俵で精米を一俵用意して、ダイドコロの小黒柱にたて口でしばりつけられて、正月の食事に用いられる。小正月のつくりものは、ハナと十六バナ、カユカキ棒が中心で、農具のつくりものやハラミ箸はなく、カタナや、その他のつくりものはみられない。

二、正月の用意

暮の何日間かけてシメ飾りや総シメ、俵を作る。近年までは母親が三日間ほどかけて俵や、サンダワラまで編み、当主一郎氏が用意している。俵は新しいわらで編み、セチ（節）米として精米した米を入れて俵づくりするが、近年は俵の中に袋を入れ、その中に米を入れて俵装している。これはダイドコロの土間にある小黒柱の元に台を置いたうえに立ててのせ、なわでしばりつける。（写真128）これは大晦日にサンダワラをとり（タテクチにして）、ここから取り出した米で年とりをして、正月を迎える。これは正月用の米であった。

シメには、キリハギとコブと豆ガラ（大豆の収かく後のサヤの部分）を小さくとり、これを一緒にさしこんで松につけて松かさりを作り、神仏に上げる。

ゴボウジメは、松飾りとした残りを十本小黒柱の米俵の上の方に、年神様の方へ向けてまとめてしばりつけられる。（写真129）餅つき

一夜餅をきらうので三十日につく。おそなえや板餅を作るが、三ヶ日は雑煮はしないから食べず、おそなえも元日の朝供える。

三、正月

三が日

元日から三日までは「ソバ縁起」で朝がソバ、夜は柱のところにしばりつけた俵の中から出した米を炊いて供え、食べる。大家族の頃は、十一日のサクイレの日まに一俵の米を食べきってしまったこともあった。



写真128 小黒柱に結びつけられた節米の俵とシメ飾り

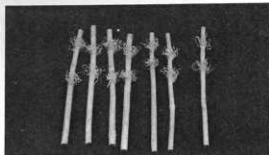


写真130 ハナ (2段のもの)



写真131 ハナ (3段のもの)

御嶽山の縁日は、正月、五月、九月にあり、各九日にオヒマチをするので、正月九日が初縁日で信者が集って行われる。
 十一日、田に入り、さんを切って松カザリに供えものをする。

オヒマチ

嶽入れ

七草
 七日朝、七草粥をつくる。

山入れ
 六日朝にする。松の枝に幣束をつけたものを持ち、山に入って立て、オサゴやオカシラツキを供えて拌み、おまいりをして、山へ入る。特に小正月の準備の木を切ることはない。

オ棚下ガシ

四日朝、おそなえやオシラキのものを集めてオジャヤにして食べた。

年男が料理するということはなかった。

三が日はイモズイモン(芋駝物)を作って神さまに上げる。大根を短冊に切ったものと里芋を味噌仕立てにしたもので、実をすくってオシラキにのせて年神様などの供える。三が日に餅を食うとデキモンができるといわれた。
 年神様の棚は、現在は建具屋に作ってもらったものを使っているが、十五年前までは、ナラの木を割って削った板を使って棚を作り、四隅を吊るすようにし、わらで編んだむしろを敷き、マキワラで幣束台を作って正月様を祀ることにしていた。



写真129 小黒柱のシメ飾り(ゴボウシメを10本ほどまとめてしばりつける)

四、モノヅクリ

十四日に行われる。ハナギは二、三日前に切ってきて、皮をむいて用意しておくもので、十二日に切ることが多い。

ハナギはニワトコで、皮をむいたものを刃物で削って作る。モノヅクリは早くやれというが、これは五月の農作業が遅れるからと説明される（農の五月といわれる作業が遅れるという）。

ハナは二段、三段、十六段の三種類がある。（写真130・131）二段は一般の神々へ上げるもので、稲荷、井戸、便所、物置、堆肥場などへも上げられる。三段ハナは、正月様、大神宮、御嶽山、年神様に上げられ、十六ハナは神棚に上げられる。全部で三十五本ぐらい作るが、供えた残りの十一、三年神には二本、神棚には三本、正月様というのには掛軸があり、そこにも上げる。

マユダマ

小さいものも大きいものもすべてまゆ形にする。大きいのは十六個ときまっておき、一緒にナラの木にさす。小さいのは小枝にさして内外の神々に供える。ハナとよぶものは、丸くしてから正木とよぶ竹の器に入れて並べて、冷えたところをさす。餅をさすことはやったことも、見たこともなく、話としても知らない。

カユカキ棒

ニワトコの木で四本作る。二本は年神様、二本は大神宮様に上げるもので、上下を切ったままで皮をむき、上の方は四つに割る。これは十五日粥の時に、餅を薄く切ってはさみこむことになっている。（写真133・134）
ハラミ箸は作ったこともなく、使ったこともない。



写真133 正月様の掛軸に供えられたカユカキ棒（これを十五日ガユに使う）

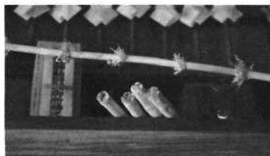


写真134 カユカキ棒は使用後神棚に上げられる（2組）



写真132 ゴボウジメをとったあとにハナを結びつける（10本ほど）

が立つことになる。マユダマと一緒に準備して、昼までには供えることになっている。昔は、十四、十五日と供えておき、十六日に下げて焼いて食べた。(写真139)



写真136 オカザリカ工後の正月棚



写真135 オカザリカ工
シマ
とて
ず
む
外
に
吊
す
て
し
ま
う
こ
と
に
な
っ
て
い
る
。松
か
ざ
り
を
外
し
、シ
メ
ナ
ワ
を
と
っ
て
集
め
、松
を
シ
メ
を
別
に
し
た
後
、シ
メ
の
よ
っ
て
あ
る
部
分
を
切
り
落
し
、幣
東
は
庭
先
の
ナ
リ
モ
ノ
（桶
で
も
ぶ
ど
う
で
も
実
の
な
る
木
）の
木
に
ま
と
め
て
結
び
つ
け
る。
（写
真
135）シ
メ
ナ
ワ
の
ヒ
ゲ
の
わ
ら
も
切
っ
て
と
る
。こ
の
わ
ら
は
田
植
え
の
時
の
苗
を
し
ば
る
ナ
エ
バ
に
な
る。
（写
真
136）

五、小正月

オニダマ

十四日朝、四合の米を炊いて、十六個のおにぎりを作り、その一つずつにウツギの枝をさす。ウツギは、さす部分の皮をむいて洗ってからさすことになっていて、重箱に入れたおむすびの上に十六本のウツギの箸



写真138 神棚にハナと十六バナを供える

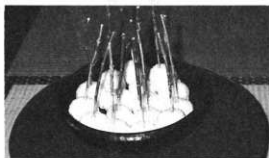


写真139 オニダマ様を（ウツギシメ枝を1本ずつさして）上げる



写真137 神棚の下にいろいろな神を祀る

ドンドンヤキ

ボンボンヤキとかいう話は聞くが、日向では昔からやったことはない。

オシラマチ

やったことがない。ことばも知らない。

十五日粥

十五日朝、小豆粥を炊いて、カユカキ棒四本を一緒にしてかきまわし、二本ずつ年神様と正月様に上げておき、二十日正月に片づけると神棚に上げて、苗代つくりの時までとっておいた。

小豆粥を炊く時、オシメのネジレの部分（ゴボウジメのなし部分）を燃すことになっており、この灰は、小豆粥のトギ汁の中に入れて塵敷まわりにまくことになっている。ナガムシ除けになるといわれた。

これがすむと主婦は遊山に行き、嫁はお客に行くことになっていた。

二十日正月

二十日の朝、お棚を片づける。マユダマもその前にとることになっている。

エビス講

二十日朝にする。エビス・大黒をおろして机の上に祀り、膳立てをして供えものをするが、カケブケといひて、いきているザコ（フナ）を二匹、どんぶりに入れて供える。吉田家も近年まで日向漁協の組合員で、多々良沼の漁に参加していたこともあるので、沼でとれたものを上げたわけである。このフナは井戸の中、又は川へ流した。魚がたくさんとれるようにというお祭りのようにカケブナを放したと思つてゐる。

六、つくりものの処分

二十日正月に片づけられたハナは、適当にオタキアゲをする。マユダマ木も同様であるが、正月のオシメは、頭の部分は小豆粥の時に燃して、灰はナガムシ除けに使われる。

オニダマのウツギの箸も適当に燃される。

カユカキ棒は、苗代づくりをした時、水口に立てられることになっていた。

ハナを養蚕のハナズリのまぶしにするというようなことはなかった。そのためか二月初午でも、スミツカリと赤飯をつくってツトツコで稲荷さまに上げることはどこでもやるが、マユダマを作って上げることはみられず、ハナをマブシとして敷くことも聞いたこともないといふ。

七、おわりに

吉田家の小正月のつくりものは、当主の一郎氏が祖父から伝えられて早くからやって来たといわれ、父嶽藏氏はやったことはないという。また、御嶽山の道場をもつということもあるが、年中行事をよく伝承しており、節米などは他で見られぬ貴重な事例である。新しい俵は、新築する家からひっぱりだこで（棟領送りの時、米を一俵つけて行くのに紙袋ではかっこうがつかないという）、毎年希望者が来るといいうのも、おもしろい時代である。

（阪本栄一）

重田昌威家のつくりもの

一、概観

伊勢崎市稲荷町は、江戸時代は佐波郡今村で明治の合併によって佐波郡宮郷村大字今となり昭和二十九年、伊勢崎市に合併された。県道高崎伊勢崎線の田中十字路から北へ駒形町へ向うと、駒形へ出る少し手前に「今村神社」があり昔の地名の名こりを残している。神社の前を西に入った集落に重田家がある。稲作、養蚕、野菜栽培を主とした農家であり、最近までは、雑木林等山林もあったが、宅地化が進むと同時に農地の基盤整備によって、山林もほとんどなくなり、地形も一変し、さらに生活様式も変り、風俗習慣等も消滅していくものが多くなつた。

二、山はじめ

一月六日の朝にする、場所は家の北東にあたるところで前橋市地内になるが、市の史跡となっている「経塚」古墳を山と言ひ、そこで山はじめをする。



写真140 山はじめ



写真141 山はじめ供物

「ゆつらじめ」を一本、供えものに「おそなえ」ひとかさね、「オサゴ」「頭つき」(にほしなど)を会席膳にのせて持って行き、古墳上にある木に「ゆつらじめ」を藁なわで結びつけ、供えものを供え拍手を打って拌み一年中無事に終るよう祈って終る。(写真140・141)山はじめが終ると、木を切るのはいつでもよい。

昔は自分の山から楢の木を切ってきて、物置など人の入らないところへ置いてかざりものに使ったが、今は家の裏に「ミズキ」を植えておき、それを切って使う。

三、木の種類

年神さま、仏だん、外かざりの木には「ミズキ」を、オシラ様には桑株の根のついたものを二つ用意する。

昔は「はし」の木は「柳」を使ったが、農地の基盤整備のため、なく

昔の「まゆだま」の十二、十六は「フタ色もち」とい
い、米の粉と米の粉に粟の粉
を混ぜたものを二種類つく
り飾ったという。また粉に
する米は「米撰機」下の実い
りのよくないものを使った
ので、「粉もち」という



写真145 十二、十六



写真146 おしらもち

「ミズヒキ」をかけて、ざしきのなげしの上にかざる。
オシラ様の十二、十六は桑の木一株を二つに四角の餅のつきたてを長方形に切り適宜の数を各枝にはりつけ(写真143)、また枝の先には米
の粉のダンゴの丸形の大きいものを十六コをさしたものを、ざしきに西側の二ヶ所、かまいのところからさげてかざる。(写真144、145)
年神様の棚の前にはミズキの大きい枝一本につきたての餅を長方形に切り各枝の横からはりつけてかざる。数はにぎやかになるまで適宜
である。



写真142 かゆかき棒



写真143 ざしきかざり



写真144 ざしきかざり

なって使うことができなくなった。
四、つくりもの、かざりかえ
十四日をかざりかえといい、つくり
ものもこの日にする。
かゆかき棒は「ニワトコ」の木、二
十五センチメートルぐらいのもの四
本、木末を尖らせ木元を十文字に割
り、つきたての餅をはさみ半紙で包み
「ミズヒキ」をかけて、年神様のたなに上
げておく。(写真142)
十二、十六は「ニワトコ」の十二芽
のものと十六芽のものを半紙で包み



写真148 十八日がゆ



写真147 供物のおかみのほち

の味は良くなかったという。

五、オシラマチ

十三日の夜は「オシラマチ」で、トシ蚕影さんの軸をかけて、重箱に、うどんを八ちよっぱ（八つのかたまり）を供える。（写真146）

六、十五日がゆ

小豆がゆを作り、その表面を、かゆかき餅の餅をはさんだ方で数回かきまわし、また半紙にくるみ「ミスヒキ」をかけて神棚へあげて置き、稲の苗代の「たんざく」の品種の境目に立てた。現在は種まきの方法が変ったので田の水口に立てる。

七、十八日がゆ

十五日の小豆がゆを十八日に家中で食べ、大正月から供えてきた、お神の鉢と木鉢を洗い（写真147）、その水を「やかん」その他の器に入れて家のまわりにまく。このようにすれば、長い虫（へびなど）が屋敷内にはいらぬといわれている。（写真148）

八、まゆかき

十八日の朝に「ざしき」に、むしろ、ござなどを敷き、供えた、十二、十六のまゆだま、餅をおろし、むしろの上にとっておく（写真149）、それを網状の袋などに入れ風通しのよいところに吊しておき、あとで「あられ」にあげてたべる。

かさりものをさした「ミスキ」「桑の株」などは「初午」（節分後はじめての午の日）のまゆだまをふかすときに燃す

十一日に「クラヒラキ」をする。蔵の戸をあけて「そうに」を供え、半日くらいあけておく、家中で「そうに」をたべる。



写真149 まゆかき

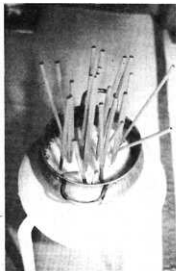


写真152 まるび



写真150 さくはじめ



写真151 さくはじめ供えもの

九、さくはじめ

十一日さくはじめをする。作樂、ゆつらじめ一本、供えものとして「おさく」「かしらつき」を用意し、畑で「さく」をひとさく切り、そのさくの中に「ゆつらじめ」を立てて供えものをしたあと、かしら手をうっておがみ、一年の農耕の無事を願作を祈る。(写真150)

十、まるび

鍋で飯を炊き、その中に箸は柳の筵を土膳をたてて神棚へ供える。(写真152)これは「オミタマサマ」へ供えるもので、大晦日と一月十四日それに節分の三回おこなう。大晦日、一月十四日、節分を願という。特別の飯を炊くこと、茶わんに煎茶山盛りにして供えるのは昔から「最高の御馳走」を供えるというのだという。

十一、むすび

周囲が宅地化によって市街的様相となり、また農家の住宅も活版式の変化に伴って大きな変革を余儀なくされていく中で、できるだけだけの努力によって伝統を続けていくことに深い感銘をうけると共に感謝の念を禁じ得ない次第である。

(奈良秀重)

岡本武夫家のつくりもの

伊勢崎市上之宮町は、江戸時代は佐波郡上之宮村で明治の合併により佐波郡宮郷村大字上之宮となり昭和二十九年伊勢崎市へ合併された。主要地方道高崎伊勢崎線の田中十字路の西方宮川の右岸あたりの集落に岡本家があり、その対岸には一月十四日夜に行われる「田あそび」で有名な上野十二社式内の倭文神社がある。岡本家は稲作、養蚕、野菜を主とした農家であり、先代は宮郷村村長をつとめる等の歴史をもった家である。

最近になって、農地の基盤整備にともなう河川改修等により一大変革を迎え、地形も様相も変わり、生活様式の変化からいままでの風俗習慣等消滅していくものが多くなった。

一、山始め

一月六日の朝「コジッコメ」と呼ぶしめ縄を一本、キリモチ（のし餅を長方形に切り二つ重ねるもの）、ゴマメ（頭つき）、おさこ、わら縄を持って屋敷の裏にある、稲荷様の前に行き、二本ある「サカキ」の一本に「コジッコメ」をわら縄で三ヶ所結びつけ、供えもののキリモチとゴマメを供え、おさこをそのまわりに散き、柏手を打って、一年の農作業の安全を祈って終る。（写真153・154）

真153・154

農地改革、基盤整備等の以前、山のある時分には、六日の朝、「山かり鎌」「縄」、「くまで」等を持って山へ行き、火を燃やしながらか、鎌をこぎ、下木、下草を刈り、木の葉をかきあつめ（くすさらい又はくすかき）午前中仕事をして、くすを持って帰り山始めを終えた（木の葉は家畜舎の中に入れてふみくさとした）。山始めが済めば小正月に使う木はいっ切ってもよい。

二、木の種類

「ハナ」に使う木は、十二、十六は「ニワトコ」、マユタマをさす木は、「桑」、「柳」の木である。昔は桑の株は、蚕のあたる家、前年蚕のあつた家の桑園



写真153 山はじめ



写真154 山はじめ供えもの

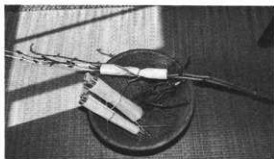


写真155 ツクリモノ

四、かざりかえ

十二、十六は桑の枝に、扁平の丸形をさし、枝の中ごろへ餅のつきたてをねりつける、これを「あられ」と呼ぶ。

十二支(さしきのまわりに十二支の神を置く)には柳の少し大型の枝に丸形のまゆだまをさし、一段バナを一つつけて飾る。(写真157)

正月様の棚は左側が正月さま、右側が「オシヨウバンサマ」で柳の小枝に餅を(四角に小さく切ったもの)を五つさしたものを飾る。

神だん、仏だん、オシラサマ、オソウデンさまは柳の小枝に小さく四角に切ったもちを五つさして



写真157 正月の棚



写真156 ハナの種類

から切ったこともあったがいまは自分の桑畑から切ってくる。

三、つくりもの

十四日に「のこぎり」「鎌」などを使い、のき場で作る、ざるなどに入れておく。(写真155)

ハナは、門松かざりは四十センチメートルぐらいのニワトコに三段にかいたものをつくり、門松に張った縄にさげるハナ、さしきの十二支に供え

るハナ、門の外に立てるハナはそれぞれ一段のものをつくる。(写真156)

かゆかき棒は「ニワトコ」三本、木元を十字字に割り餅をはさむ、木末は尖らせる。これを半紙でくるみ、「ミスヒキ」で結ぶ。

十二、十六は「ニワトコ」の十二芽一本、十六芽一本を合せ、中央を半紙でくるみ、「ミスヒキ」で結ぶ。まゆだまの十二、十六は十四日の朝、米の粉で、扁平の丸形につくり、小形の丸形、中央をくびれたまゆの形につくる。



写真158 ザシキカザリ



写真160 カザリカエ



写真161 マユカキ

(一) かゆかき棒は苗代の水口に立てる
 (二) 十五日がゆ(小豆がゆ)を供えたオカミのハチを洗った水を家のまわりにまく。ナガモノ(ヘビヤムカデ)が家に入らないようにとの願いをこめるもの。
 (三) 小豆がゆは吹いて食べないようにあらかじめまましてから食べるようにしている。吹いて食べると田植に風が吹くといわれている。
 (四) まゆかきは十六日の朝飯のあと、家の外かざりからとり次に家の中のものをとる。まゆをとる時には「よくまゆを作ったね」と言いながら取り、はずしたマユは水をかけて「シヨウギ」などに入れておき、煮たり「アラレ」にして食べる。(写真161)
 (五) 正月の棚は二十日に片づける。
 (六) 二十日は「ハツカ正月」といい昔は「ハヨウ」(田植の整地をするとき、馬の田かき鞍に「マンガ」を結びつける縄 一本と「クワユツラ」(桑をまとめる縄) 二束、「カタカケ」(木の桶でこやしをまくときに肩にかけるもの) を一つ作り、カユカキ棒とあわせ「シモダイコク」(土間の大きい柱) に結びつける。この仕事をしてからでないと遊べなかったと

六、小正月の行事とのかかわり



写真159 オシラサマカザリ

飾る。
 門松は三段のハナと柳の小枝に小さく四角に切った餅を五つさしたものを立て、門松の両はしから張った縄に一段バナをさげる。
 門の外には柳の小枝にさした餅とを立てる。(写真158・159・160)
 五、道祖神まつり
 十四日のかざりかえの日の夕方、前の田で、大正月のかざりものを燃やして、松の枝の黒こげになったものを、火をよく消して、屋根うらへ置く。火災の難をのがれるという。



写真162 20日正月のつくりもの



写真163 さくだて

いう。(写真162)

(七) 十一日に「コジッコメ」と供えもののオサゴとカシラツキを半紙に包み持ち、畝をたずさえて田(畑)へ行き「さく」を三さく(一さくの長さは適宜)を切り、そのさくに「コジッコメ」を立て、供えものをして、八方よろずの神に五穀豊穡をお祈りする。(写真163)

(八) なべかり(昔のこと)

一月四日に新しい「むこ」が嫁の実家へ行き、嫁の家の道具を借りてご馳走をつくり、嫁の実家の人、親類の人に食べてもらう風習があったという。

七、おわりに

この小正月行事は他の地方にみられないものがあり、消滅していくおそれのある中で、続けられていることは、まことに貴重である。

(奈良秀重)

浜野藤太郎家のつくりもの



写真163-1

- 一、山入り
一月六日がヤブイリと言う。家のまわりがヤブで、今年は申酉の方向に松をたてておかざりをした。エ方にゆく。
ハナキを作るニワトコはヤブに生えているもので作った。昔はヤマダワの根付きのものをとってきて、まゆ玉の大きいものをつけた。(写真163-1・2・163-1・3)
まゆ玉の木は昔はナラの木だったが、今はカキの枝になった。歳神の棚につけた。
- 二、木の種類

ハナにはニワトコを使った。今はハナにせず、短く(十五センチメートルほど)切って置くだけ。
まゆ玉カキの木を使った。

アワボ・ヒエボは昔作っていた。タイと場に二本おいた。竹に十センチメートルほどのハナをつけたもの。

三、作る日、場所、道具

一月十四日に作る。場所は特に決まっていない。
若かざりと言う。

四、作り方

まゆ玉は暮のうちに米の粉を用意しておき作った。
湯でこねて作った。



写真163-2



写真163-3

今は全て同じ大きさが、昔は 供える神によって大きさ、形が違った。

昔は綿も作ったので、綿のつぼみの形のものも作った。まるめてから、両手の中指、薬指、人指し指の六本で上よりおさえこんで作った。ゆで汁は家のまわりにまいた。火災予防になると言う。

五、飾りかえ、供え方

ハナは神棚、歳神様、えびす様、おかま様、浅間様、氏神様、馬頭観世音（馬を飼っていたので）、地蔵様、稲荷様、弁天様、井戸に供えた。

正月のおかざりは十四日にとり、柿の木にしばった。果物がよくなるようにという意味。

ヤマグワを使ったまゆ玉の時には、片方に十二個、片方に十六個さした。外のもは二個。

十五日朝には小豆粥を作った。吹いて食べると田植えの時に風が吹くと言う。

カユカキ棒は、先をこがらせ、上にまゆ玉をさした。粥にいれ、おかざりのワラでくくって神棚においた。のち、苗代の水口にさした。米の品種の名札をつけて、品種ごとにさした。三種くらい作っていた。

また、正月は柳の枝の箸で食べた。正月棚がある間は家族はみんなそれを使った。

お棚にあげるものも、馬頭観世音、氏神、地蔵、八幡様にもこの箸であげた。

(井野誠二)

大塚耕作家のつくりもの

一、山入り

山入りの日は特に決まっていない。十一日ころに行くが、ニワトコは一週間位前に切り、皮をむいてはしておく。七草のころに行った。

家ではきれいな、人の踏んで歩かないところにおいた。ニワトコは日中干して夜しまった。二〜三日干すと木が白くなった。

二、木の種類

ハナにはニワトコを使う。かざりものにはノデンボウを使った。まゆ玉にはシラハギ・ヤマクワ・ミズブサ（福徳）を使う。ハラミバシにはノデンボウを使った。

三、造る日、場所、道具

つくりものは十三日に作りかざった。座敷や縁側で作った。道具はハナカキナタとズリ（ノコギリ）を使い、台にはモチつきのキネを使った。キネはきれいで、柄があり動かないので使った。作ったものは、しょうぎにいられておいた。

四、作り方

ハナは一、二段、十六段の三種ある。キネの柄にニワトコをつけ、手前に引くようにしてハナをかく。（写真165）

カユカキ棒（ケエカキ）はノデンボウで二本作り、先を四ツ割りにしてマユ玉をはさんでカユをかきまわした。その後、半紙一枚でマユ玉をつけたところをつつみ、水引きでしばった。

昔、本家には水田があり、本家では苗代の水口にさした。

ハラミバシは、神様にあげる分一膳と家族数七〜八膳に、エビス様に二膳あげた。



写真165



写真164



写真166

切った。

刀は大小で、大は二尺くらい。柄は皮をのこし、のこりの部分の皮をむいた。(写真167)

農道具は作らない。

まゆだまは米の粉とトウモロコシの粉を使った。二色あるのは、白いまゆとコーケンまゆの意味。(写真168)



写真167

ニワトコのクズをいれた。五カ所をしぼる。(儀に同じ) たてに立てて、二段のミズサをさしてオカマ様のまゆ玉をさした。

コヤシバには竹に一段のハナを四個と、長さ十センチメートル位の棒状のものと、まゆ玉各四個をつけたものをさした。竹は折れないように上は

先祖様にも三膳あげた。八寸くらいのノデンボウを割り、形をととのえた。(写真166)

福儀は、ニワトコやナラの木をしぼり、中に



写真168

粉は七草前にひいておき、十三日に作った。

まゆ玉の木は、ヤマクワ、シラハギ、ミズサで、ヤマクワは三株作り三年交代で使った。(枝の具合が良い) 畑に作っておき、根ごと取り、座敷におき、オシラ様にした。(写真169)

シラハギは十五本くらい切って作った。

ミズサは、福儀の上にさすまゆ玉に使った二段を切ると芯をいれて三段になる。

まゆ玉はまるめて作り、一つは炉の中にいれた。火の神様にあげたもので、子供が災難にあわないように。

し、足りない二本使う(写真173)、オカマ様、昔糸を引いた糸引場のところであった。

エビス様のまゆ玉は二十日のエビス講までのごしておき、朝かいて、煮てたべる。

また、まゆ玉の外、臼の形を白(米粉)、黄色(トウモロコシ)各一個を作り、臼の中にはマユ玉を入れて歳神様に供える。この臼は二十日のエビス様に煮て供える。

まゆ玉は三、四センチメートルの小さいものが普通だが十六個は大きいもの。

ゆで汁は家のまわりに右回りに回ってまいた。物置や庭のカキヤカリなどの実なる木の根のまわりにもまいた。実がなるといふ。キレットとないようにまいた。あるとへビが入るといふ。ヤカンでまいた。

五、飾りかえ・供え方

十三日に作り、十四日の朝にミカンのついでにオシメをとった。十四日の朝がオマツワカレと言う。マツはほどいてとった。正月に不幸があるとカマで縄を切った。

ハナは、二段のものが、大神宮様、エビス様、外の神、鎮守様、村の神様、墓、十六段のものはカイドとコヤシバにおいた。コヤシバのものは竹に棒のものが四つとひとつバナが一つにまゆ玉が四つをつけたもの。



写真170



写真171

あげた所は、歳神様、神棚、米をしまう所の俵神様、仏壇(七個ついたもの)(写真170)、縁側(オテントウ様)にあげる(写真171、172)、お稲荷さま、村の鎮守様、ヒゲン様(炉の神様でイロリのところ)に五個つけたものをあげた、エビス様(二十個さ



写真172 お日様の松かざり



写真173



写真174



写真175

（写真174）

福儀は、ニワトコやナラの木、のでんぼうをしばり、中にクズを入れ、五カ所しはって作った。大きいほど穀類がとれると言う。一年間とっておき、翌年の初午にイモを煮るのに使った。

また、福儀の上のオカマ

様のまゆ玉は、オカマ様の子供が三十一人いるのでその分はあげるようになっており、三十三〜四個、ミズグサガイのものにつけた。（写真175）

刀はヤマクワの木にかけておき、のちにお稲荷様にまともておさめた。（写真176）
オシラ様へのまゆ玉は、十六個のジュウロクデンジと言う。丸いのが八個、まゆ玉八個。

六、小正月の行事との関わり

・十五日朝は白粥を食べた。カユカキ棒で三回かきませた。粥は吹いて食べてはいけないと言う。食べる

と嫁に行く時に風が吹くと言う。十五日は昼ウドンで夜はゴハン。

・十六日は墓まいりをした。仏様の日と言い、墓地に行き、線香をあげた。

また、十六日にはウシゴヤシを出した。いそがしくても少しでも出すものと言った。麦を煮て牛・馬にく

れた。

・十七日にはまゆ玉わかれて、まゆ玉をとった。まゆだから袋にいれておくんだと言った。そのまゆ玉は

十八日朝に煮て食べた。
・ハラミ箸はエビス様のだけのこしてイロロに「おさめた」。火にくべるとは言わない。



写真176



写真177

おたちになるので、ウブスナ様におさめる。(写真178)

七、その他

十一日がクワダテで、松をさし、三サク切り、紙を置いてそなえものをして一杯ずつ食べた。(写真

17)

正月のオタナイタは尺二寸のナラの木の板を五枚ナタで割って作り、縄であんで作った。上に七、八センチメートルのワラの束をおき、ヤクジンさまと歳神様のヘイソクをさした。ヤクジン様はウの日に

(井野誠一)

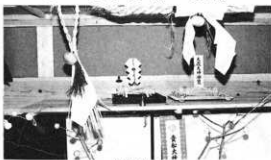


写真178

尾池住夫家のつくりもの

一、山入り

山入りの日、場所ともに特に決まっていない。とってきた木はタイドコや軒下においた。

二、木の種類

ハナはワトコやミズキを使った。刀やハラミ箸はデンボウで作り、カユカキ棒もデンボウで作った。
 歳神様や仏壇のまゆ玉の木は白ハキで、座敷に飾るまゆ玉の木は福付の山鶯。家の外に供えるまゆ玉はミズキをふたまたにしたものに白と黒のまゆ玉を二個つづした。(写真179・180・181)

三、作る日、場所、道具

十三日にオマツをひく。カザリカエと言う。その日に作る。まゆ玉はお勝手で、ケズリ花は軒下で作った。道具はハナカキチタを使った。ハナを作ったあまりはオカマ様にかざる依にした。(写真182)



写真180



写真181



写真182



写真179



写真184



写真183

四、作り方

ハナは、一段、二段、十六段の三種類。先から、手前に引きながらハナをかく。(写真183)

二段は歳神様に、一段はまゆ玉の木につけたり、いろいろな神様、神社、墓地に、十六段はオカイクの神様のもので(足が十六本なので)、オカッテにおいた。(写真184)

カユカキ樫は三十七センチメートルのミズキの木の皮をむき、下とがらせ、上に十の割れ目をいれ、十の割れ目にまゆ玉を入れて半紙にくるみ、水引きをかける。ボクの根本にかざった。

ハラミバシはノデンボウをナタで割り、さらにけずって箸の中心を米粒のようにふくらませて作った。家族に歳神様の分一膳を加えて作った。(写真185)

福俵は上にミズキの三段のものを三本さし、三十六個のまゆ玉がつくようにさしてゆく。

刀は柄は皮をのこし、×のきざみをつける。柄のところにケズリを少しつける。

まゆ玉は米の粉とトウモロコシの粉で作る。金、銀の意味である。粟の粉でも昔作ったことがある。粉は一週間くらい前に用意しておいた。十三日に作り、ゆでた汁は家のまわりにまき、モグラがくぐらないようにした。

五、飾りかえ、供え方

十三日がオカザリカエになる。

神棚にはまゆ玉をシラハキに五コか七コつけたものと、二段のハナを供えた。歳神様は神棚にコンブ、麻、手ぬぐいをさけてそれにしている。イ



写真185



写真186

家



写真187



写真188

ツケウチではノデンボウの木を割って棚を作った。
 (写真186)

仏壇にはシラハギで神棚と同じもの。エビス様にはシラハギで五コか七コまゆ玉をつけたものと二段のハナ。オカマサマにはミズグサのまゆ玉。

水神様にはシラハギのまゆ玉。墓地にはミズグサのまゆ玉と二段のハナ。虚空蔵さま、道祖神、地蔵、外の神様にもかざった。台所にカイコの神様に、としてまゆ玉をかざった。十六デンジという十センチメートルほどの大きさのまゆ型の、(丸いものもある)まゆ玉をつけた。十六バナのそばにかざった。(写真187)

カイコをしているうちは飾ってくれと言われた。十六デンジは「リユーポー」の木を使った。横にして台所にさげた。オカマ様は三十六人の子供がいたので、三十六個のまゆ玉をさす。

また、「ヒデンボサツサマ」(菩薩?)へとして、イロリの四隅に灰を掘り、まゆ玉をいけた。子供がやけどをしないと云う。小さいまゆ玉を一番はじめにまるめて、すぐにゆですにいける。「ヒデンボサツサマにあげます」とくりかえし言いながらいける。(写真188)

まゆ玉はふかしたのち、シヨギにあげて化粧粉をふりかけた。(祝いなので、仏には粉はかけない。)
 オシラ様には一升ますにまゆ玉を山かけにいれて「オシラ様へあげます」と言っ
 あげた。また、イモレンガクと言って、イモをクシでさしたものを一クシ作り、初午
 の前の晩にまゆ玉といっしょにあげた。

刀は作ったのち、人の見えないうちにしまっておくと魔除になると言っ。古いものは次々年に処分した。

座敷には根付の山桑をかざり、まゆ玉、ハナをかざり、下に刀、カユカキ棒、ハラミ箸をおいた。(写真189)

鳥は縁起物で必ずつけるものとされた。



写真189

六、小正月の行事との関わり

十五日には小豆粥を作った。カユカキ棒でかきませ、ハラミバシと神棚にあげ、のち田の水口においた。吹いて食べると田植えに風が吹くと言っ。

十六日には朝、牛馬のコヤシ出しをした。

また、十六日は墓まいりをした。米の粉でダンゴを作り、二個ずつくらい昼すぎにあげた。

まゆ玉をとるのは十六日。エビス様のまゆ玉をのこしてあととった。二十日におつけにいれて煮て、エビス様にあげた。

まゆ玉はとったあとオヒツなどにいれた。

他の小正月の飾りものも十六日にとった。

七、その他

正月の行事

一月二日、仕事はじめて山に行けば枝の一本もとってくる。

一月四日、タナザライで、四日間、神棚にあげた御飯をみんなさけておじやにして上げる。

一月六日、「ムイカドロ」と言い、この日にトロを食べるとカゼをひかない、中気にならないと言っ。

一月七日、七草がゆ。七草を取り、年神様の前で「七草なすなとうとの殿が日本の土地へ渡らぬ内にトントン」ととなえながらきさみ、七日に草をませ粥をたく。

一月十一日、サクを切り、おかざりをとっておさめ、御飯をあげた。

尾池家の家例

尾池家ではモチはつけない。「冬至は何をしてもいい」ので、この日にモチをついた。

また、塩家例で、モチもショールユもミソもだめである。小豆粥で三日目をすこす。イモの塩汁をイモズイモンと言い、里イモ、ニンジン、ダイコンを煮たもの。おかずはナッパ(シヤクシナ)のシライ(塩出ししたもの)。

正月の飾りには麻とてぬぐいとコブをさげるが、麻は丈夫、てぬぐいは長い、丈夫で長生き、コブはヨロコブを表す。

神棚の東にお札をはっておくところがあり、上に順に重ねてはってゆく。その場所は取りはずしができ、火事の時にははずして火事の方に向けると火事が来ないし、棟にあげておくと火事にならないと言っ。

小池幸市家のつくりもの

一、概観

黒保根村上田沢は国道百二十号線を西に入った谷沿いにある。小池家はその谷の小さい段丘上に位置する。細地が主で、林業もさかんなところである。古くは浦丸山医光寺と周辺の十数戸で成っていた集落であるが、現在は戸数もかなりふえている。(写真190)

小池家のつくりものの特長は、つくりものの技術の高さである。材料の選択から加工にいたるまで細心の工夫がなされている。

二、山入り

山には七章のころに入る。十三日〜十四日に作るので、その一週間前に切ると木のかわき具合が良い。入る山は特に決まっていない。狩猟の時にハナギ(ミズブサ)の良く出ている所をさがしておいた。足らない時にはよそからもらった。

山入りの時には、はじめに切る木の下に、塩・米・ニボシ(頭付)を半紙の上に置いてから切った。

切る時には木の質をみて、ハナのかきやすいものを切った。一メートルくらいの長さに切り、ハナをかく時に長さを調節した。

長いものはミズブサ、短いコバナ用はニワトコを切った。

まとめて家に運び、皮をむいて陰干しにして玄関においた。

木は小さい節でもエングが切れることがある。良いものは八本切っても三本の割合くらい。

太さは四年生から五年生でメガネのガラスくらいの太さになる。一番目の節のところまでは育ちが悪いので、二番目の節のところまで切る。一番目の節からはすっと伸びている。三番目の節でメガネのガラスの半分の太さになる。

切った木は神様に使うものなので、またいだり、さわったりはさせない。



写真190

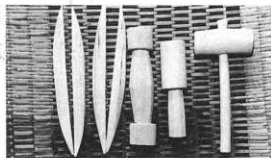


写真191

三、木の種類

ハナにはミズブサ・ニワトコを使い、ハラミバシ・ツチ・儀・キネはノデンボウを使う。刀はミズブサの、ハナをかけたあとの木で大小を作り神様（天照皇大神宮）にあげた。（写真191・192）柄のところに二十五ほどのケズリのエンをつけた。

まゆ玉の木は、年神様・エビス様はカシワウツギ、

仏壇はシラハギの木（ハナは一本）、神棚はシラハギを使う。昔はザシキに根のついた山桑の木を使いかけたが、今はかざらない。

稲荷様、庭の土康神さま、寺、薬師、赤城神社、井戸、トイレ、タイヒに一つずつあげた。ミズブサの肢のある枝に小さいまゆ玉をつけたも

の。

アワボ・ヒエボはない。箸の木はノデンボウを使った。

四、作る日、場所、道具

十三日か十四日に作る。ハナギを切る日は良い日を選ぶ。大安か先勝の日にまず一本は切っておく。

明るいうちは中縁で、夜になると居間で作った。道具は先祖からのハナカキナタを使った。作ったらその日のうちにかざった。

五、作り方

ハナはイツボンガキとニホンガキがあり、ニホンガキはハナが厚かった。ミズブサの木を足の指でおさえ、手前にハナカキナタを引いてハナをかいた。昔はハナの元の厚さは一銭貨の厚さで、ハナはすきとおる



写真193



写真194

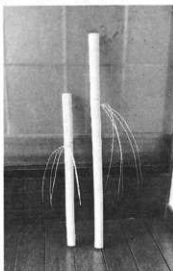


写真192



写真195

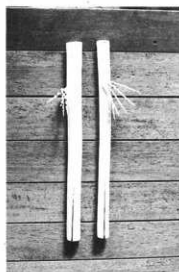


写真196

字に割り、十五日朝、マユ玉をはきみ、カユをかきませ、半紙でつつみ、麻でしばり、のち神棚にあげた。のち稲荷様のわきにおさめた。先近くにはセンチメートルほどのハナがつく。二本で一組になるのは米と麦の意味。(写真196)

ハラミバシは家族の人数分作り、十五日朝のオカユを食べた。

福儀はノデンボウのかいたクスをまとめて作った。

まゆだまは米の粉とトウモロコシの粉で作る、一つの枝に一個ずつ、または数が多くつけるものには色のついた小判もまぜてつけた。粉は一週間ぐらい前に用意した。昔は臼が七つある共同水車でひいた。まゆ玉を作るのは十四日。

まゆ玉はマユの形にした。ザシキのものはコバン型にした。エビス様には二十個かざった。

六、飾りかえ、供え方

十三日に飾りかえをした。エビス様は二十日。

十三日夜、御飯をあげて、十四日、朝の日の出前に松飾りはとり、集めてもやした。オマツワカレという。色々煮たものをあげている。

ハナをそなえる所は、神棚、年神棚、仏壇、えびす様、釜神様(火伏せの神と俵神様がある)、井戸神、墓地(昔)、赤城神社、薬師さま、山の神・堆肥にそなえた。

山の神は山の中にあり、一月十二日に十二様のまつりがあった。コトハジメという。竹筒に酒をいれて、あげる。ニボシ、塩、米をあげた。十二月の十二日は最後の山まつりの日。

福儀はお勝手におき、のち使ってもやした。

ほどにした。エビス様には
イッポンガキとニホンガキ
を組にしてあげた。ハナは
朝日を形どったもの。ハナ
のエンの長さは約六十センチ
メートル。(写真193・194・
195)

カユカキ棒はミズブサの
木を使い作った。先を十文

七、小正月の行事との関わり

十五日のおかゆはふつうの白かゆ。ハラミバシで食べた。ハシはのちもやした。十六日は堆肥を出す日。堆肥にもハナをおいた。お盆の十六日にも必ず出した。

十六日は「お客歩きするな」と言う。昔、寺の年始は四日だが四日に行けなかった所に六日ごろまでに壇家廻りをすませたもの。まゆ玉は十六日がおわると十八日ごろに片つけた。とっておいて、ゆでてたべのこりを少し動物にくれた。

エビス様は二十日にまゆだまをとって雑煮にして煮てそなえた。赤飯とケンチン汁をあげた。

小正月の飾りものは十七・八日ごろに片づけ、稲荷さまにおさめたり、もやしたりした。

八、その他

家例で三方日は野菜入りの雑煮。

年神様はナラの木を割った板に、ワラミゴ（俄と呼ぶ）であんであげた。ワラには幣束を立てる。（写真197）松かさりは昔は芯かさりであったが、親の代から枝かさりになった。

家には一本ミズブサの木を榎やグシにいれるものと言う。「水」の字をいれるのと同じで防火の意味がある。

ハナは氣候で変化し、天気が良いとよれてくるが、天気が悪いとのびてしまふ。

十二講まつりにはウドン・酒が出た。山仕事を受けた人四、五人で集った。神様はアゴヒゲが長くはえ、ねじれた杖をもち両側にお使いの山犬がいると言われる。お産の神様ともいう。

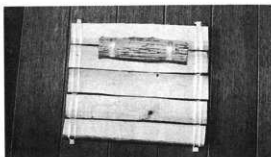


写真197

星野照次家のつくりもの

一、概 観

星野家は桐生市川内町に所在する。市街地の北西、渡良瀬川の東岸で山がせまった南傾斜の地である。星野家では、ハナ、ハラミバシ、まゆ玉を作って飾る。

ここの数年作っていなかったが、調査のために再現していただいた。

二、山 入 り

正月六日が山入りで、上の山の山神様のところに行く。大きな木の株のあるところで、ノデンボウを切ってくる。

まるもちを一段、おさこに魚の煮干しを供える。こ幣は持っていったり持っていかなかったりである。拜むが言葉はない。

ニワトコは庭に生えているものを切る。十三日に切り、庭の隅においておく。そのとき、まゆ玉の木用のアカモクを切って用意する。ハギの木を使うときれいという話も聞いたという。ないときはならの木を使った。



写真198

三、ものつくり

正月十三日に庭にむしろをして作る。のこぎりとハナカキナタを使う。台は木の丸太を使った。(写真198)

二段と三段のハナを作った。カユカキ棒は作らない。川内の金子家では作っていたという。(写真199・200・201)

ノデンボウでハラミバシを作る。家族の数に神



写真200



写真199



写真201



写真202

棚、仏様、床の間の方で三膳分余計に作った。〈写真202〉
福儀、アワボ・ヒエボ、農道具は作らない。

木刀は作らないが、ひいおじいさんが作っていた。
まゆ玉は十三日に作った。くず米なので黒かった。ふかしてつくり、

形はまゆの形だ

った。歳神様の

十六は大きかつ

た。おはちかお

ひつにいられてさ

した。

四、お飾り かえ



写真203

十三日が飾りかえだった。三段のハナを神棚に三、仏壇、えびす、かまど、便所に飾った。二段のものを
門松、いなり様の門松、井戸に飾った。〈写真203〉
木刀は神棚に供えていた。

まゆ玉飾りは、神棚に二本で、一つは歳神様の十六の大きいもの、もう一つはちいさいものだった。小判
や鳥の形の飾り菓子を飾った。〈写真204〉

五、まゆかき

十七日か十八日にまゆ玉をとった。ふたのあるいれものにいられた。風をくると粉になるといった。ま
ゆ玉はいろりの灰の中に入れて焼き、しょう油か砂糖しょう油をつけて食べた。



写真204

六、その他

正月七日に柿と栗の木に成り木賣めをした。ナタで木にきずをつけ、「なるかならぬか、ならぬとぶったぎるぞ」といい、もう一人が「なりません、なりません」といっておかゆを傷口にいれた。

あずき粥を食べる時はあつくても吹いてたべてはいけないといわれた。田植えに風がふくからだという。

かたづけは十七日で、いなり様にあげた。大正月の飾りも同じである。

昭和の始めころ、ザマにハナを入れて売りにきた。飾り菓子も売った。

道祖神まつり、水祝い、福儀、アワボ・ヒエボ、農具はなかった。

(井野修)

赤石恒男家のつくりもの

一、概観

赤石家は、山田郡大間々町大字小平字狸原に所在する。近年有名になった小平の鐘乳洞から沢ぞいの道をさらに六キロメートルほど登ったところである。買物は渡良瀬川の吊橋をわたって勢多東村の花輪にいった。道は一里ほどである。山が迫り、太陽は十時ごろに顔をだし、三時ごろには見えなくなってしまう。

当主恒雄氏は昭和十四年生まれ、父親の跡をうけてつくりものを作るようになったという。調査については、母親のロクさん（明治三十三年一月十五日生）に話を伺ったほか、同所赤石嘉一氏に話を伺った。

ハナとカドバナ、ジュウロクデンジを作り、カドバナとジュウロクデンジは一年中飾っておく。田がないところであるので、それに関する習俗は見られない。

二、山入り

正月の松は十二月に山に入りとってきた。ニワトコは裏の山にあるが、ミズブサは山の尾根の方に行かないとなかった。十一日のモノツクリの日に三さくクワダテをして山に木を切りに行った。その日にツクリモノを作った。

木はミズブサとニワトコをつくりもの用に切り、まゆ玉をさす木としてシラハギとアブラハギを切った。外のまゆ玉の木にはナラの木を使った。

嘉一家では、十二月十五日頃の暦の良い日のあきの方の山に行った。どこの山でもよかった。供えものはおさここと煮干しを半紙にのせて供えた。「お松様をむかえにきました」「ボクをむかえにきました」と言う。ボクはトウグワを使いとってくるが、いつも五〜六つ畑にふせてある。正月十日か十一日に畑から掘ってきて用意する。ほかの木はのこぎりで切ってコモにまいて担いでくる。納屋か軒下において乾かし、座敷に上げる。

木はミズブサとニワトコをツクリモノのボクとして、他にシラハギとアブラハギをまゆ玉の木として切った。山菜、ドロボウの木、ノデンボウも使った。

町の木はドロボウの木なので、一まわりしかないという。



写真206

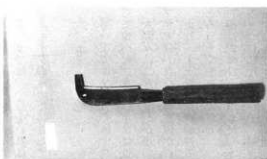


写真205

三、ものづくり

ものづくりは正月十一日で、山から切ってきた木で作った。

ニワトコで十六段のものと三段、六段のものを作った。(写真205)

ノデンボウの木でハラミ、バシを作り、六個おにぎりを作り、おみたまさまにあげるものとしてハシをさす。

ノデンボウでカユカキ棒を作った。小口を十字に割り、まゆ玉を一つさす。畑にもっていくと、鳩がまいたものを食べないという。

木刀を二本作った。柄は皮を残し、二本ハナをかけた。

まゆ玉の粉は日をみてひいておく。十四日の午前中に作り、飾るのは昼すぎ。

嘉一家では、米と稗の粉を使った。米では白、稗では薄ぐろくすぐり割れるまゆ玉になった。とうもろこしのをいれると黄色になった。また、ゆで汁を飲むとかぜをひかないといった。

四、飾りかえ

十四日に飾りかえをした。

十六段のものはジュウロクデンジといって、神棚に一年中飾っておいた。(写真206)

ハナは歳神、天照皇太神宮、三ほう荒神、屋びら様(屋根)、えびす様、釜神様、床の間、入口に飾る。(写真207・208)

カドバナは入り口に二本立て、縄をわたして真中からさげた。一年中さげておく。(写真209・210・211)

まゆ玉はシラハギの木を石臼の台につけて飾った。蕨を根の回りにかこった。小判のかたちの飾り菓子もさげた。

嘉一家では、丸い形とまゆの形の他にとりの形を一つ作った。白いもの

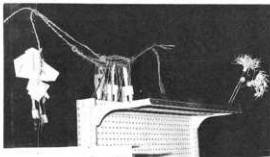


写真208



写真207



写真209

嘉一家では、小豆をいれないもので、カユカキ棒でかきまわした。そのあとボクの木の下にさしておいた。

六、その他

嘉一家ではマユカキは十八日で、とってはんだいに入れ、水にひたし、煮て食べた。また、ボクはこの日に畑にかけた。

大間々は一、五、七が市の日でハナを売る店がでた。現在も一軒ミズブサで作ったハナを主人が作って売っている店がある。

正月二十三日に百姓の神である愛宕様の祭りを行っている。おせんころうそくをあげた。

昔は男のひとの祭りで、ふんどしになって水浴びをした。今は女の人のまつりになっている。精進料理を作り、夜中の十一時ころ小豆粥を食べる。この小豆粥は「あわせちゃいけない」という言い方で、おかずは

五、十五日粥
粥を作ってハラミバシで食べた。熱くても吹いて食べるとかいこの間中風が吹くと言われた。あらい汁をの字形にまいた。



写真210

でうぐいすだという。また、ジウウロクデンジは普通のまゆ玉より三倍くらい大きかった。また、福儀を作ってボクの木においた。
ならの木にマユ玉のかたちの団子をさしたものをジウウロクデンジといった。
家の外に飾るまゆ玉は、稲荷、畑、墓になら木の一股になったものに二つまゆ玉をさした。
(写真212)



写真211



写真212

一切食べてはいけなかった。

大神宮と歳神のまゆ玉を工用のうしの日に食べると「いきれをひかない」(攪乱をおこさない)といわれた。当主は、比較的若く伝承という点では心配はいらないようである。

(井野修二)

猪野松次郎家のつくりもの

一、概観

近年、ビニールハウスによるニラ・シュンギク・ブロッコリーなどの野菜栽培が盛んな地域である。(写真213)
小正月のつくりものも時代の変遷とともにザシキ飾り等に簡略化されたものも見受けられるが、全体として昔ながらの習俗を守り続けている様子が認められる。一月十三日のモチツキで作ったモチの小片(モチバナ)をマユ玉とともに木にさして飾るところなどに地域としての特徴を伺うことができる。

二、山入り

作りものの木は、一月十一日に伐ることにしているが、屋敷内のもので三本程が必要なので、特に山入りをするようなことはない。また、供えものなどもしない。
この日は鍛立ての日でもある。



写真213 玉村町箱石付近の景観

この時期に芽がのびるニワトコの木をノコギリかカマ(全長一八・〇センチメートル、刃部九・三センチメートル)を用いて伐っている。伐り方には特に決まったことはない。
以前は、伐った木をワラナワで縛って西方の蔵の屋根の下へ立て掛けて置いたりしましたが、特に供えものはしていなかった。

三、木の種類

ハナやつくりものを使う木としてニワトコを用いている。

マユ玉をさす木には、以前はクヌギを使っていたが、クワの枝にさすことが多くなっている。アカツキの桑のカブツをカイコの神様のマユ玉をさすために用いていた。

その他、家内外に供えるマユ玉の木には、アカ

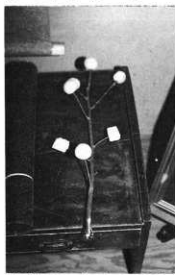


写真214 トコノマのマユ玉・モチバナの飾り



写真216 ハナ作り



写真215 つくりものの道具類



写真217 作られた多数のハナ



写真218 トコノマの十二段のハナ

ハナは、ニワトコの木を適当な長さに切り、皮を付けたまま、芽と芽との間を四方に
一か所ずつコガ
タナで手前へ割
る。(写真216・
217)
トコノマのハ
ナは、ニワトコ
の木で十二段の
芽を付けたもの

五、作り方

また、玉村町川井の薬師堂の四月四日などの祭りの日には、養蚕のタネイタと同様の大きさのサトウ付きの菓子が売られていたこともある。

ツキのクワを用いるが、エダに七か十二個のマユ玉とモチバナと一緒にさしている。(写真214)
オモテザシキの飾りにクワのカブツを用いたり、箸の木としてヤナギを使ったりもしていたことがある。

四、作る日・場所・道具
小正月のつくりものを作る日は、一月十四日でオカザリカエと呼んでいる。
バラックや庭先で、ムシロを敷いて作業をしている。道具(写真215)としては、ノコギリ(全長四八センチメートル)、刃部二センチメートル・コガタナ(全長二〇センチメートル)、刃部八・六センチメートル・刺定バサミのほか、ハナ専用のナタも用いている。これは猪野氏の父源三郎氏(明治十一年生)が、高崎八幡原のマルハチという鍛冶屋から求めてきたものだという。台は特に決まったものはない。作ったものは、そのまま手分けでお供えているが、特にまとめて置いておくようなことはない。ハナなどは特に売っていなかったが、十一月二十八日の玉村の松市などでは、コバンなどの形をしたオカザリ菓子を売っていた。

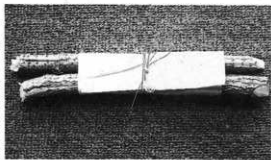


写真219 カユカキ棒

一対を供えた。ハナは中途を一カ所だけ削っている。(写真218) 堆肥場には同様にして一メートル程のものを立てていたこともある。

カユカキ棒は、ノコギリで二十五〜三十センチメートル程の適当な長さにニワトコの木を切り、頭の部分をナタ(全長三五・〇センチメートル、刃部一七・七センチメートル)などで四つ割りにしてマユ玉を挟み込む。他端はカマでカドを削り落としておく。一組一本を半紙に包み、ミズヒキで縛っておく。(写真219)

ハラミ箸は特に作っていないかった。

福儀・アワボヒエボ・木刀・農道具などのつくりものもしていないが、ニワトコの余りで、子供のワルサにタケを裂いたものを付けてやっていたことがあった。

マユ玉作りには米の粉を用い、一月十四日に行っている。これとは別にウルチやモチ米を用いて十三日にモチツキをし、モチバナも作っている。

ミに入れたマユ玉を木にさしていくが、ゆでた汁は、ナベで再びゆでて、牛馬など家畜の飲料にしてしまった。アカツキの桑のカブツに、丸形のマユ玉のほか、マユ形のもの十二個、ウルチとモチ米の「十六」として丸モチ十六個を倍の二組三十二個を作り一緒にさして飾っていた。

現在は、それぞれ、ヌイ糸で十二個をさして吊した正月飾りのミカンなどをお盆等に合わせてザシキに供えて飾っている。(写真220) 以前は、クヌギの木を用いて、桑の葉に見立てたノシモチと丸形のマユ玉を三、四個組み合わせたものも飾っていたことがある。

六、飾りかえ・供え方

正月棚は、オモテの間の天井から吊していた。オカオガクシなどシメ飾りを暮れの二十九日に作り、三十日に飾り付けていた。(写真221) 村町高田貫井宏家の正月飾り)

神棚への供えものは、暮れの三十一日と正月一、二、三日はソバと御飯であり、四日朝からが雑煮となる。飾りかえは、一月十四日の午前中に行っている。



写真220 小正月のザシキ飾り



写真221 玉村町新田・眞井宏家の正月棚とお飾り

ハナは、カドグチと氏神様に二対すつ、大神宮・荒神・年神様にそれぞれ三対のほか、下ダイコク・井戸神・エビスサマ・トコノマ・オカッテ・便所、物置・葺室・豚小屋・墓石などに一つずつ供え付けている。昭和十年頃までは、子ども組のオヤカタを中心として道祖神小屋なども作られていた。近くの道祖神の石像（文政三年・西迎中の刻銘がある）に十四日の夜、酒とゴモクメシとを供えていた。ゴモクは皆で作って食べたりもしていた。

現在は、一月十四日にオカザリを各家で持ち寄ったものをまとめて、翌十五日の朝、ドンド焼きをしている。

水祝いなどは特になかった。

七、小正月の行事との関わり

オシラマチ・オミタマサマとつくりものなどは特になかった。

十五日の小豆粥では、カユの上をカユカキ棒を使ってかき混ぜた。暮れの三十日頃に家族数と神様の分のヤナギバシを作ったが、この箸でカユを食べる際、吹いて食べてはいけないとされた。田植えの時に風が吹

くからという。

カユカキ棒は、後に神棚へ供えられ、イネのナエマへ持っていかれたりするが、ヤナギバシはまとめて燃してしまった。

一月十六日には、堆肥場へモッコで二人で担って肥を出していたこともあった。

十八日には、湯でカユをゆるめてオハチなどに入れたものを家のまわりに撒いたりもした。

マユ玉を取るマユカキの日は、十六日の朝で、ミなどの器に入れたが、モチの方はハチに入れている。小正月の供えもの・飾りものの片付けも同じ十六日にかけてきている。つくりものなどは、ニワトコの乾きが良くないので、節分頃まで、縛って西方へ置いておくが、しばらくしてまとめて燃してしまっている。

二十日正月には、カシの枝に十三日についたモチをモメン（ワタ）のハナに見立てたものとノシモチを三十一センチメートル位に長くしたものとを飾り、下ダイコクへ供えていたこともあった。

（神宮善彦）

（写真213）玉村町箱石付近の景観

（写真214）トコノマのマユ玉・モチバナの飾り

（写真215）つくりものの道具

- 〔写真216〕 ハナ作り
〔写真217〕 作られた多数のハナ
〔写真218〕 トコノマの十二段のハナ
〔写真219〕 カユカキ楯
〔写真220〕 小正月のザシキ飾り
〔写真221〕 玉村町番田・貫井宏家の正月棚とお飾り

関沼豊太郎家のつくりもの

一、はじめに

六十一年度調査の時、藤岡市金井地区の関沼園蔵家の調査を実施したが、同家と関沼豊太郎家とは本家分家関係で、園蔵家に飾られたつくりものは、豊太郎氏製作になるものであったことから、今回あらためて調査をしたものである。

関沼豊太郎氏は、長く藤岡市役所に勤務していたが、早くから小正月つくりものを手がけ、退職した今日では、公民館等の伝統行事の講習会に講師として参加したりしての活動もしている。神流川流域の山中一帯とはちがった「日野地区」の伝統を伝える各種のつくりものを作っており、甘栗町秋畑地区にみられるものと同なりをもっている。

二、山入り

正月二日、アキの方の山へ行く。オサゴを持って山に入り、半紙をさいて立木にしばりつけ（ごんな木でもよい）、オサゴを上げて無事を祈ってから木を伐る。

木はノコ（鯉）で伐るが、ヌリデンボ（ヌルデ）はカタナ（木刀）や農道具を作る木、ニワトコ、ミズキ、マメンブチなどはハナを作る木。マイダマ木は一年ばきの赤い木で、古い木を伐った所へ行く、新しい枝が出ていて赤いので、これをマオダマ木にする。

笹はハナカキの日にとる。

ミズキは、ハナをかくと白くあがるので作ったものがよく見えるからよいが、木が少いので余り使わない。マメンブチは、二年木になると特に赤くなってきれいな木で、一段のハナをかき、神棚の上下に飾るものを作る。ヌルデ（ヌリデ）のハナはほとんど作らなかった。

三、ものづくり

十四日にやる。ドンドンヤキをすませて来てからマユダマやハナを飾ると、忙がしいので、十三日に作っておくことが多い。庭先にむしろを敷いたりして、ハナカキガマで、ハナをいたないように細工し、できたものはむしろの上に並べておいて飾りつける。（写真222）



写真222 モノツクリ



写真223 ハナ-正月棚の棚上に飾ったりする

ハナ

ハナギは切ってから十日ほどたつて、乾き始めたぐらいが作り易い。全部の皮をむいてやればよいが、寒い時期で、皮をむきたての冷たいのをやるのは大変で、一段分ずつ皮をむいて、上の方からハナを削いで十六段にするのがよい。一段のハナも一本ずつむいてはハナをかくようにする。(写真223・224) タナシメ(年神様の棚の下に下げるもの)のハナは、上から竹の枝をさして吊るせるようにする。(写真225)

ハラミバシ

作らない。昔は作った。

カユカキ棒

一組二本作る。ヌルデの木で、長さは特にきまりはない。特に下の方をとがらせ、上は四つ割りにし使う時はマユタマをさす。

農道具

エンガ・テンガは各一本、ヨコギネ、ワラタヌキは各一本、ヌルデの木を割って作る。(写真226)

カタナ

一本作る。柄の部分は皮を残し、四〜五個の×印の模様を作る。刀身の部分は皮をむくが、サゲオとして二本の皮を残して結んで表へ出るようにする。

コヤシ場飾り

現在は作らないので名前も忘れてしまったが、人の背丈よりも大きい笹竹を切ってきて、てっぺんにハナを一本つけ、枝にはニワトコの短い



写真225 棚下に飾るハナ

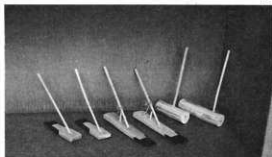


写真226 つくりものの農道具(左からテンガ、エンガ、極、杵)



写真224 門松のあとに立てるハナ



写真227 マユダマとハナで飾られた正月棚



写真228 十六バナ

棒（マルンボウ）のようなものをいくつもさして、こやしば（堆肥場）へ上げたものをおぼえている。福俵

作ったことはない。

マユダマ

米の粉で作る。ふつうのものは小さい丸いもの。十六は、ソロバン玉、小判、丸い形、マユ形を各四個ずつ合計十六個の大きいものを作って、桑株の枝にさす。年神棚に上げるものである。ゆでたマ

ユダマはシヨウキ（正木）に入れてさましてからマユダマ木にさす。三升で十六玉を一組作る。

ハナ

一段の大きなもの三本を、年神棚の上に一本ずつ立てる。タナウエノハナというもので、その下に、タナシタノハナとよばれる吊り下げた形のハナが一本ずつ合計三本吊るされる。その場所は、松かさりが上げられたところであり、マユダマも飾られる。（写真227・228）

神棚には別にハナが上げられ、マユダマも供えられる、仏壇、えびす様、釜神様、便所などにも一本ずつ上げられる。（写真229）

門松のところには、お松柱に向いあって二本立てられ（写真230）、屋敷の裏からの入口にも（お勝手から出たところ）「仄神様」という名前のハナが上げられる（正月の松かさりも上げられていたところである）。

農道具

キネ、ワラタタキは横にさす。エンガテンガはそれぞれひもで吊るして供える。

アワボ・ヒエボ

豊作を祈るものとして、堆肥場に立てられていた。暮には馬小屋の肥を出すから新しか積み上げられている上に立てられていたが、昭和初年までのことだったという。



写真229 便所に供えられたマユダマとハナ



写真230 お松杭のハナ-1対になる

五、小正月行事との関わり

悪魔払い

六十一年までやっていた。

十三日夜、子ども達が、リヤカーに太鼓をつけて、一戸毎にまわる。ケエドを入るのに「悪魔払いにきました、入ってよいですか」といって親方は外にいて、あとの子は、カシの木にオンベロ(御幣)をつけたものを振って「悪魔払い」といって部屋中をまわっておはらいをする。もらった御役儀やお菓子などは最後に親方が分けてくれる。

ドンドンヤキ

一般の家は、七草がすむと松かざりを外すので、七日か八日に子ども達が集めた。関沼家は、十四日早朝に外すので、それから持って行くことになる。昔は高等科二年の子を先頭に道祖神の小屋を作ったが、近年は小屋を作らず、お松を集めて積み上げて燃すだけになった。お松集めに来た時にオボシメシ(寄附)をしておくが、これには、道祖神の印のあるお札を配った。三十七、八年頃、小学校の方から「ドンドンヤキ中止の話」があったが、伝統行事を止めるわけにはいかないというので中止しないで今日までやっている。中学三年生は除く子ども達が全員参加で、近年は女子も加わるようになっていく。

十三日夜、親方の家が宿になって、五目飯をつくり(小学生一合、中学生一合の米と、やさいを出しあって炊く)、これを食べて、泊らずに帰る。

十四日朝、道祖神(石碑)に五目飯を供えてから、合図の太鼓を鳴らしてまわり、ドンドンヤキをした。カタナは焼かなかった。(十一日に道祖神には四方に竹を立て、シメをはっておいた)(写真23)

サラリーマンが多くなったこともあり、宿するのに不都合があるから十四日のドンドンヤキを十五日にしようという意見が出たが、結局、いままでのように十四日にやることになった。

十五日粥

十五日朝、小豆粥を炊いて、カユカキ棒で粥をかきまわしてから食べた。その時祖父がひとり言のように「米やいろいろの作物がとれますように」という意味のこ



写真231 シメをはった小正月の道祖神

とをいながらやってきた。丸くかきまわして「かたいと田がかけない」、「ゆるいと田がかきやすい」といい、熱くても吹いてはいけないといわれた。

肥出し

十六日には「動物小屋をきれいにしろ」といって、馬を出しておいて肥を出した。少しでも出すものといわれた。

マイカキ

十七日にマユダマをとって片づける。箱の中に入れて保存しておき、焼いて食べる。クズ米で作ったマユダマは割れないが、よい米を粉にしてマユダマを作ると割れ易い。

エビス講

二十日朝、エビス講をする。朝エビスで、マユダマをゆでて、しょうゆ汁の中で煮て味つけて、皿盛りにして供えて、家中で食べる。

二十日正月

二十日には、本家。新家で一緒になってハヨウナワになった。ハヨウナワは、馬耕の時に使う大事な太いなわで、ハシゴを屋根にかけ、三本のなわをつるして、しめなわのようにわらを足しながら三本よりになって作ったので、丈夫なものができた。ハヨウナワは丸くまとめ、水引きをかけて梁に上げておいた。

ハナ

十九日に片づける。十六日バナは、二十日正月がすむと神棚に上げておいて、一年間たつて翌年新しいものとさしかえをする。

六、おわりに

関沼豊太郎家の小正月づくりものは、ニワトコとマメンブチでハナを作り、ヌリデでその他のづくりものをする。づくりものは、神流川流域と似ているが、オノノハはなく、カタナは一本しか作らず、それもトンドン焼きで焼いてこがすこともない点は山中（万場町、中里村、上野村）とはちがっている。しかもハナは、同じ鮎川流域でありながら、隣りあっている日野のものともちがっていることも興味にひかれるものである。

(阪本英一)

飯塚貞文家のつくりもの

一、概観

吾妻郡中之条町大字大塚は、江戸時代、吾妻郡大塚村であったが、明治の町村合併によって吾妻郡名久田村大字大塚となり、昭和の町村合併で中之条町大字大塚となった。

国道一四五号線（日光軽井沢線）の中之条町から沼田市へ向うと約五キロメートルぐらいのところであり、城跡壁谷の寄居、壁谷の縄文時代の包蔵地が山寄りであって、めずらしい簡型土偶の出土地になっている。

飯塚家は、兼業農家で当主は渋川の会社員として勤務している。つくりものには、子どもときからかわっており、父親から伝授されたものである。以前は各種のかざりものを作ったが現在は「カキバナ」と「キクバナ」だけになった。以前に行ってきたものの概要を記すと共に、「カキバナ」と「キクバナ」づくりを主として報告する。

二、仕事始め

一月二日朝祝い（家中で雑煮を食べる）をすませてから、供えものにし餅を四角に切ったものを一かさね（四きれ）を半紙に包み、南の方角の山へ行く、ボク（ミズブサ、ヤマツクワをこう呼ぶ）を切る前に、餅を包んだ紙を半分に切り一方を餅を供える台にし、一方を手で切って御幣にして木の枝に結びつけ、十二様をおがみ、一年の山仕事の安全をお願いする。

木を切るとき「こんじん様」の方角に倒さないようにして切る。一本をこのように切ればあとはどのように切ってもよい、切ったボクは背負いまたは肩にかついで運び、物置きじゃまにならないところに置く。

三、木の種類

ハナをかく木は「ミズブサ」、つくりものを使う木は「オツカド」である。

まゆだまをさす木は、年神、仏だん、ざしきかざり、家の外かざり等へは、ミズブサもヤマツクワもどちらも使う。ただし、カマガミさまはミズブサを使う、火ぶせのためにという意味からという。またカマガミさまに飾った松は一年間とらないで、これは、取ったら小どもがヤケドをしたことがあったからという。

アワボ、ヒエボ、箸の木はオツカドを使う。

四、作る日

十三日に家のデエドコ(十間)にむしろなどを敷いて、木の台(なんでも)をして、のこぎり、竹わりナタ、ナタ、花かきナタなどを使って作り、箕に入れて「えんがわ」等に置く。中之条町では、一月十一日にボク市が催され「ボク」「ハナ」等小正月のかざりものを売っている。

五、作り方

ハナは「カキバナ」と呼び「ツル」と「カメ」の二種、それと「キクバナ」を作る。写真232)かつては十二段、十六段はニワトコを使っていたが今は作っていない。

カユカキ樺は、オツカドを二十センチメートルぐらいに切り、木元を十文字にワリを入れ、まゆだまをはさみ、木の末を尖らせる。

ハラミバシは、オツカドを二十五センチメートルぐらいに切って割り、中央をはらませ両はしを尖らせて、家の人数だけつくる。

アワボ、ヒエボは、オツカドの比較的細いものを十五センチメートルぐらいに切り、八本は皮をむき、八本は皮をむかずに竹を十六に割りその先にさし、コイニワにたてる。

まゆだまは十三日に米の粉(昔はヒエ、ソバの粉を使った)でつくる。小さい丸型は、ざしき、仏だん、エビスさま、年神、外かざりなどに供え(写真231)、ざしきに十ハメエダマといい、大型で中央をくびらせた「まゆ」の形にしたものをつくる。昔は鉢にヤマックワを植えたものを一つ用意し、一年交替に十六メエダマを飾ったという。

ゆで汁は家番にあたえたという。



写真232-1 えびす様



写真232 ハナの各種



写真233 かみだなかざり

六、飾りかえ

飾りかえは十三日にする。

ハナは、神だなには、まゆだまをボクにさしそのボクに「ツル」「カメ」のカキバナをさげる。(写真233) さしき飾りは、ボクにまゆだまとキクバナをさしてかざる。(写真234)

道祖神(ドウロクジン)は青年の指導により子どもがつくり、十四日の朝、ドンドンヤキをする。

青年の世話係が朝六時頃に火をつけ燃えている近くに、ヤクドシ(女十九、三十三歳、男二十五、四十二歳)の人が「みかん」を投げる。(写真235)

昔は子供がドウロクジン小屋にとまり、暗いうちから「メ(モ) エタツク、メエタツク、ドウロクジンが

各家では、ミズブサの芯もちの枝に「まゆだま」をさしてきて、この火で焼き(写真236)家へ帰って家中で食べる(風邪をひかないという)。アワボ、ヒエボは肥神さまに供えるという。

まゆだまは、神棚へ十二コをさす外は三つ五つ等適宜にさして供える。

七、小正月との関わり

(一) 十四日は家畜の年とりといひ会席膳の上に「そば、汁、おひたし」を茶わんなどに盛り、うまやの神様に供えたあと家畜に与えたという。

(二) 初午には一升ますの中に「まぶし」をつくり、その中に「まゆだま」をいれて神だなへ供えたという。

(三) 十六日には「オサゴ」「餅のキレハシ」を墓に供え、墓参りをした。

(四) 馬屋肥は、初ザルの日に肥出しをした。

(五) 十八日には、とっておいた十五日の小豆ガユをゆるくして家中で



写真235 ドンドンヤキ



写真236 ドンドンヤキ



写真234 さしきかざり

たべた。

(六) まゆかきは十九日にする、まゆだまをとっておき、初めて草刈りに行くとき持っていくと「ヘビ」にかまれないという。

(七) 小正月の飾りもの、供えものは、二十日の風にあわせないといいので十九日に片づけ、木は燃料とした。

(八) カユカキ機、ハラミ箸は苗代の水口に立てる。

八、おわりに

家屋が変り、職業や生活様式の変化と社会情勢の移り変りにともない、消滅していく中で、このように行事ができる要素を持っていること、しかも、すばらしい技術で、ハナを作っている姿はまことに貴重なものと言える。

(奈良秀重)

清水儀平家のつくりもの

一、概 観

高崎市上場町周辺は、昭和五五年の市道環状線開通以降も急速な都市化が進められ、その開発につれて沿線の人々の生活や習慣の中にも変化が現われてきている。(写真237)しかし、その交通量の多い道路の一步内側では、間略化されたとはいえず、昔ながらの風俗習慣を伝えている家々も少なくない。(写真238)マユ玉飾りの中に見られる「ヤサイモン」と呼ばれる各種作物等のかたちやザシキ飾りには、それぞれの豊穣を願う心意をうかがうことができる。

二、山 入 り

一月六日は「ムイカヤマ」といい、昭和十二、三年頃までは朝方に川端の土手のヤナギの木を伐りに行っていた。今は、ニワトコの木が正月用として家の庭の隅や裏方に植えてあり、それを伐ってくる。

(写真239)

(ニワトコは、葉を取って陰干しにした利尿の薬として、また、葉の天ぷらにして食用としても使ったという。)

特に供えもの等はなく、クワキリガマのみを使用し、ナタやノコギリは持っていないが、木の伐り方についても特に制約はなかったが、あまり大きなも



写真238 正月のカドマツ飾り
(高崎市上場町、清水儀代松家)



写真239 庭に植えられたニワトコ
の木



写真237 開発の進む市道環状線周辺

のを伐らないよう、他の燃料になる木を伐らないように心掛けていた。

以前は、「カゴキ伐りに行くべえや。」などと言いながら二、三人で近くへ出掛けていたが、オサゴやニボシを持って行って振りまいたこともあった。伐った木は、ナワで縛り、肩に担いだりした。その後、ツボヤマや家の裏などの日陰に置いておくが、踏みだりしてはいけなかったという。

三、木の種類

ハナをはじめ、ハラミ箸・カユカキ棒等の木としてニワトコを用いている。また、ヤナギやナラ・エゴ・モクの木などで家族分の正月用の箸を作っていたこともあった。

ザシキに飾るマユ玉の木などには、以前はヤマツクワを用いたが、今はヤナギの木のほか、部分的にはクヌギやモクの木も用いられている。

四、作る日・場所・道具

一月十二日の夜が「マイタマツクリ」、翌十三日を「カザリカエ」と呼んでいる。

つくりものはエンガワなどで作られるが、道具としては、カマ（クワキリガマ）・ナタ・ノコギリなどがあるが、台は特に用いていない。ニワトコの木などは、すぐに作り始めるが、作ったものを入れたり置いたりする特定のことにはなかった。

ハナなどを売る市はなかったが、マユ玉飾り等に付けるハナガシ（カザリガシ）は、一月十日の高崎琴平様で売っていた。タワラ・マユ玉・クワッパ・オイベスタイコク・マスなどの形をしたもので、色も赤・黄・青・緑・白の五種類ほどがあった。昭和八、十年頃のこと、一組十個ほどで十五、二十銭位だった。

五、作り方

ハナは、ニワトコの木の上の部分のカマを用いて、五段、七段というように奇数として皮を剥ぐようにして削る。（写真240）

カユカキ棒は、ニワトコの木をノコギリで適当な長さに切り、アタマの部分にナタなどで四ツ割りにし、マユ玉を挟む。先の方は、ナタ・カマで尖らせる。ハ



写真241 カマでハラミ箸を作る



写真240 カマでニワトコの木を削る

ラミ箸は、ナクでニワトコの木を四ツ割りにし、カマを用いて皮を剥いて両端を細く仕上げ、(写真24)一組だけ作るが、以前は家族の数を作っていた。

アワボヒエボは作っていないが、堆肥場へは、昭和十二、三年頃までニワトコのはなを一本だけ供えていた。

福儀・木刀・農道具などのつくりものはしていない。

マユ玉には、米の粉を用いており、一月十二日の夜に家中で作られ、それをふかしている。丸形とマユ形のものを作り、ショウウギに入れてマユ玉木にさしていく。その他、十二日の午後には、ニウスほどモチ搦きをし、丸モチの十六を作っている。

六、飾りかえ・供え方

カザリカエは一月十三日の朝に行っている。

ニワトコの木で作った長い二本のはなは、「オイワイギ」として、床の間の上部に横にして供えられる。先端を南に、元を北方にしている。二本を半紙で包み、「御祝 清水」と墨書し、水引で縛っている。

ドンド焼きは、一月十四日の朝、鳥子(すなわいこ)稲荷神社の参道などで総代表を中心に行われていた。上小場では、この他、東・西・前の三カ所でも行っていた(清水家は東に入る)。

十三日の昼過ぎに道祖神小屋を作るが、オヤカタ(高等小二年生)は学校を早引きしてきた。下級生なども午前だけで学校が終わりとなった。

外まわりのオマツなどは、八日の朝に道祖神子供が、道祖神場に集めてきていた。九日から十三日にかけては、ワラ・ナワ・タケなどをはじめ、ダルマ・書き初めなどが集まってきた。十三日は、カザリカエの内飾りのオマツなどもできてきた。この日の午後には、スケツトとして大人たちも手伝いをしてくれた。外まわりのマユ玉なども持ち寄られ、夕食にはオヤカタの家でコンニャク・ダイコン・イモ・ニンジンなどと一緒にマユ玉も入れた「グツニ」を食べられた。昭和三十年頃までは、道祖神の石像(昭和三年(一七六六)へもオカユが進ぜられた。(写真24)小屋の中では、オデンのヒッパタキやアメを食べたり、アマザケを飲むこともできた。

子供たちは、各家々で「へエガミくんない」と言いながら、五十十銭程を紙に包んでもらうことができた。これは、最初はオヤカタのものとなってまとめられた。

東の小路を夜八、九時頃、ワキドウリュウやコワキの子供たちがテンピン棒に担



写真242 道祖神に供えられたコジツコメとマユ玉飾り



写真243 道祖神の小屋
(高崎市剣崎町にて)

ったテエコをオヤカタが叩いて、「ネロヤ ネロヤ」と言いながら回った。十二時頃には「ネタカネタカ」の文句となり、その後四時には「ドウソジシガモエルヨ ハヤヨガアケルヨ」などと変わっていく。

朝にはオミキとして、水一升酒一升とを混ぜたものを用意しておいた。

朝六〜八時頃にはドンド焼きが行われ、マユ玉やスルメなどを焼いて食べ、無病息災を祈った。

た。また、「道祖神大穴」と書かれたお供えの半紙を切ってつないだものなども一緒に燃された。高崎成田町の桑原屋などから仕入れてきた棒アメをニンベツとして二本位ずつ分けてやったが、スケツトキが十錢程度に分けていた。他は、アメ十本と、余ればお金を三錢くらいにしていた。道祖神の小屋にはシノの簡単なつくりのもの「コソウ」と、タケでできた大きな「オソウ」と呼ばれるものがあつたという。(写真243)

マユ玉は、昭和十三年の正月棚をしていた頃までは、三尺位のマユダマ木を十二本程棚の上からさげていたこともあつた。また、仏さまや荒神様など家の内まわりには、比較的大きなマユ玉飾りをしていた。(写真244)

外まわりでは、門口のシメ飾りのあつたところへは、一本ずつ二本を供えるほか、クラ・ヤシキイナリ・サルタヒコ・ベンジョなどへも供えられた。

ザシキの飾りは、タケ節を真中の柱として、その切口の左右互い違いに、マユダマ木を差し込み飾っている。(写真245) 丸形のもののほか、クヌギやモクの木を小さく端切つてその二又の部分のマユダマ木に引っかけるようにして、マユ形や丸いコジユウロクと呼ばれるモチとを十八個さして飾るようにつけてトコカザリをしている。以前は、それぞれ大型のオオジユウロクをしていたという。

また、マユ玉飾りの中に「ヤサイモン」と呼ばれる、手のひらにのるくらい大きさに作られるものがある。これは、ナス・キュウリ・インゲン・(サト)イモ・モメン(ワタノハナ)・オカイコとクワのハ・ウマ(毎年千文・ブタなどの形をしたもので、それぞれ二つ位ずつ



写真245 ザシキの小正月飾り



写真244 神棚にマユ玉飾りを供える



写真246 マユ玉飾りの「ヤサイモン」

作られている。(写真246)

これらは十四日に、大黒柱のところへマユダマの木と一緒にカシヤタケの葉のついたエダを添え、そこへさして飾ったりもしていた。現在は、ザシキの大きなマユ玉飾りの元ところに、御膳の上に半紙をのせ、それにヤサイモンを置いて供えている。

十センチ角程に切ったモチを二つ重ねのお供えとして、床の間・神棚・オイナリサンなどへも半紙を敷いて供えた。

七、小正月の行事との関わり

一月十四日の夜から十五日にかけて「マルメドシ」と呼んでいる。

正月の神棚のところへ木の小鉢に十二個メシを小さく丸めたものを入れ、そこへお箸をそれぞれ立ててお供えした。

一月十五日には、アズキガユをし、主人が食べる。カユカキ棒一本は半紙で包まれ、水引をし「御祝清水」と墨で書いて正月棚へ上げておいたが、現在は床の間へ供えられている。二十日正月に作った代掻きの水と一緒に小黒柱に縛っておいたこともあった。その後、田植えの際、ナエマの水口へ持って行かれたりもした。

一月十六日の朝は、マユカキをした。ショウギに入れて取ったマユ玉をまとめて煮るが、これはイトトリを意味しているという。ダイコンやナを一緒に入れて煮て食べている。

正月には「五日タメ」といってタメをムギにくれた。また、甲の日にサゴエ(タイヒ)を出したりもしていた。

十五日ガユの残りをうすめて、十八日に屋敷まわりにナベとシヤモジとで撒き、ムシ(ナガムシ、ヘビ)除けとした。残りのマユ玉は、オカイコの時に焼いてしょうゆを付けて食べたり、揚げたりしていた。

また、「コオリモチ」として保存し、田植えの初日に食べたりもした。腹痛にならないといわれた。

ハナなどは、四月の大掃除の頃まで置いておき、その後片付け、まとめて燃してしまふ。箸は、オカイコの時にコシリ(コクソ)を取ったりするのに使ったりもした。

十九日の夜、ハヨナワをタイトコロからコザ(ザシキ)まで誤ケン程の長さになって、小判型に巻いて束ね、その真中にカユカキ棒をそれと一緒に小黒柱のところのオソウゼンサマ(タイトコロの神様)へ縛り付けた。

小正月のつくりもの(四)

—中・東毛編—

平成二年三月二十五日 印刷

平成二年三月三十一日 発行

編集 群馬県教育委員会文化財保護課

発行 群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町一—一—

☎ 〇二七二—(23) 一一一内線四〇六二

印刷 株式会社 東方印刷